
ゴブリンシャーマンに召喚されたら、ダークエルフだった...

伊藤ナノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴブリンシャーマンに召喚されたら、ダークエルフだった…

【Nコード】

N4313Y

【作者名】

伊藤ナノ

【あらすじ】

ゴブリンシャーマンに召喚されてしまった。それもRTSのキャラクターだった。なぜかダークエルフになってしまった主人公。
リアルタイムストラテジー

基本は1人称です。設定は自分でも謎です。練習作です、生暖かい目で見てください。

それと、キーワードにロボット、未来とあるのは間違いではありません。

2章は23話で終了する予定です。次章からロボット、未来の世界になります。

（主人公はやがてチートになっていきます。チート主人公が苦手な場合はご注意ください。

ブログ

自分の名は真田誠司。36才。

廃人生産工場と呼ばれる携帯系IT企業に務めていたが、自分はこの年で廃人になりかかった。

廃人というと具体的には痛む、頭痛やら上半身がいろいろ痛む。ストレス過剰による神経系の病気だった。

そのため、会社を長期休暇していた。

趣味は元空手、30才までやっていた。それからウィンドサーフィン、クライミングが好きになった。

典型的なアウトドア派だ。

ただ、廃人生活でRTSをやるようになった。スポーツができなくなったからだ。

RTSというリアルタイムストラテジーゲームだ。

古代文明から始まり農民により資源を採取して中世、近代文明へとレベルアップし、文明同士をぶつけ合う対戦ゲームだ。

自分は呪術師のいる文明が好きだった。

呪術師の能力は、農民の資源採取速度アップ、農民・兵の生産速度アップ、兵のHP回復、そして敵を味方に変えてしまう能力だ。

呪術師により敵より早く資源を採取し、敵より早く文明をレベルア

ツプし、敵より多く兵を生産し、敵より有利に戦うのだ。

呪術師がいる方は、マヤ、アステカ、エジプトなどの文明。

呪術師がいない方は、ヨーロッパなどの文明だ。

。 RTSの説明は以上になる。

人生に挫折し、病院に向かう途中で駅のホームで線路に落ちる女性を見た。

女性を助けたはいいが、自分は助からないようだった。

いまから避難用の穴に潜り込む時間がない。目の前にはもう電車が来ていた。

電車に轢かれて死ぬ運命だとそのとき諦めた。

そのとき、なにやら眩しい光に包まれた。

そして、なにやら薄暗いところにいる。俺の目の前にはいわゆるゴブリン。足元の魔方陣が光っている…。

いわゆる魔方陣の真ん中にいるってことは、これは召喚術？

ありえないと思うが、ゴブリンシャーマンの召喚によりここに呼び出されたようだ。

ただ、俺が呪術師だということだけなぜか理解していた。そう、RTSの呪術師だ。

どうやらここは洞窟らしい。

そして、体が自然に動いた。目の前のゴブリンを蹴り倒した。体が軽い。以前より遥かに体が軽くパワフルだ！
なにより頭痛がしない！廃人からの復活をとげた！

ゴブリンの首がへし折れる音がしたが、かまわず暴れた。
ゴブリンたちは短剣や長剣をもっていたが、俺を召喚したことに驚いたらしい。

その隙に2人まで倒した。

そのうち1人が落とした短剣を拾った。

夢中で3人目を刺そうとした。相手が動き始めたがその動きが遅く感じる。

ぐさつと首に刺した。一撃だ。

最後に残ったのはゴブリンシャーマンだけになった。そして、なにやら唱えているようだ。

火を吹いた！。驚いた、まじでファンタジーのようだ。火を避けたが、肩を掠めた。

まじで痛い（涙）。

短剣を持って襲いかかろうとしたが、呪術師の能力を使えとなぜだか思った。

そして、杖を持っている右手を掴んでゴブリンシャーマンを地面に叩きのめした。

呪術師の能力を使った。

それは相手の意識を奪って操る力だった。ゴブリンシャーマンの意識を奪った。

落ち着いたところで探知を発動した。

探知とは、全体回復や全体強化（筋力や俊敏さを強化する）を行うために味方全員を全て探知してから発動する。

そういう機能だ。

有効範囲がかなり広いため、周囲の敵を探知することもできる。

死角でも半径100mくらいなら探知できるため、便利な能力だ。

どうやら敵が複数はいるがまだかなり距離がある。

100mくらいといったところか。死角になっているのでしばらくは大丈夫だろう。

意識を奪うこともできるが、今の所、同時に意識を奪っておけるのは3人くらいが限界のようだ。

それに意識を奪うのに時間がかかるのが痛い。それを一人づつやらないといけないので微妙な能力だ。

まずは、自分に全体回復だ。傷がみるみる治っていく。おおおおおおお、感動した！

後は、このゴブリンシャーマンから情報をいただけるかどうかだ。ゴブリン語は知らんし、試しに意思で念話のようなものができるか試してみよう。

とりあえず、洞窟から出ることが最優先だ。

今の位置を聞いてみると、中階層の最上部らしい。低階層が上にある。そうすると、出口は上だろう。

階段の位置も確かめた。そこから先は知らないらしい。今一、使えないなコイツ。

長剣と短剣を持って、ゴブリンシャーマンを連れていくことにする。

そこで違和感に気づいた。

そう、以前の体とは違うのだ。背も高くなってる。なんか、やけに肌が黒い……。

嫌な予感しかない。

体を眺めてみると人間っぽいのは確かだ。

服は以前のままだ。顔を触ってみた。

なんか人間っぽいけど、耳が変だ。とんがってるやん；。

猫耳とかそんなじゃない。ふさふさしてないし、そうエルフっぽいとんがり具合。

……ダークエルフ？

いやいや、この世界の人はみんな耳がとんがっていて肌がインド人みたいなものかもしれん。

とりあえず、ここを出てから考えてみよう。

探知を発動しながらゴブリンシャーマンを連れて階段をあがっていた。

階段へ向かう方向には敵はいなかった。

ここが低階層というところらしい。

なんか景色が暗視カメラっぽい。この目は赤外線にも対応してたりするのかな。

それより、この階に敵がいる。探知によるとまたゴブリンっぽい。3匹いる、とりあえず1匹を支配してから残り2匹を襲わせよう。

1番後ろのやつを意識を奪う。

どうやら知力の差によって意識を奪う時間が違うらしい。差が大きいほど簡単に奪えるが、逆に自分より知力が高いと無理っぽい。お馬鹿なのかさくつと奪えた。後ろから前の2匹を攻撃したところ、うまくいったようだ。

出口を目指して歩いていると大トカゲみたいなのがいた。

知力が低すぎると探知できないようだ。いきなり襲いかかってきた。長剣で牽制しながらゴブリンシャーマンにファイヤーボールみたいな魔法を使わせた。

動きが鈍くなったのでトドメを刺した。

なんとか戦闘を繰り返してたら、だんだんと倒すコツが分かってきた。

そして、階段が見えた。また階段かよ！と内心想ったけど、探知と意識を奪うのが強いのでなんとかなった。

低階層の敵は知力が低いようだ。それに中階層と違って3、4匹の少PTだけだ。

むしろ、探知が効かないスライム、角が生えたでかいウサギ、大トカゲが邪魔だ。不意打ちで襲ってくる……。

全体回復があるのでダメージはあまり気にならない。それと全体強化（筋力や俊敏さを強化する）がかなり使える。ただし、全体回復と全体強化は同時には使えない。どちらか切り替えながら進む。

全体回復があっても、やっぱり怪我するのは痛い…。

全体回復や全体強化にも魔力を消費するんだろうと思ったら、ゴブリンシャーマンによると魔力を使ってるようには思えないと言っている。MP（魔力）じゃないとするとST系スタミナのかな。使ってもそんな感じがする。

RTSでも呪術師は、無限に全体回復、全体強化を使ってたのでMP系だと無理があるんだろう。

なんとか階段を上がって、やっと出口が見えてきた。

どうやら低階層は10階層あったようだ。

いらなくなったゴブリンシャーマンの喉を掻き切った。

外でゴ布林連れてたらまず怪しまれるし、消すしかない。

外に出て見えたのは森かと思ったら、知らない街並みだった。

第1話 呪術師

今は朝日が昇る時間のようだ。

まだ、出歩く人が少ないようなので探知を使って見つからないように物陰に隠れてしばらく観察をしていた。

まず、分かったのは普通の人間が多い。後は、虎っぽい人や狼っぽい人がたまにいる。獣人というやつだろうか。

耳がとんがってる人はいないようだ。肌が黒い人もいない…。

話してる会話を遠くから聞いていると、ドイツ語っぽいようだ。なぜドイツ？。

自分は、高校で第二外国語、大学で第一外国語がドイツ語だったので片言なら分かる程度なのでドイツ語っぽいものと分かった。高校ではなぜかドイツ語研究会という部にも入っていた。ドイツ系の高校だったのだ。

とりあえず、会話をしてみないとにも情報が手に入らない…。

物陰から話しやすい相手を選んでみた。

まず、冒険者っぽいのは武器をもってるのでいきなり斬りかかられるのはゴメンだ。

商人っぽい相手のほうがいいだろう。

若い男性の商人っぽい人に声をかけてみたところ、逃げられた…。周りの目がなんか痛い…。

服装か？それともやっぱりダークエルフっぽい外見か？そういえば、両手に短剣と長剣をもっていた…。

これか？いや全部だろう（ー；）。

武器をしまつて、痛い視線を浴びながら通りを進んでみるとエルフっぽい人をみつけた。ハーフエルフだろうか。

若干、人間っぽい。

声をかけると最初は驚いたようだが、逃げないで会話をしてくれた。ダークエルフというのは、やはり珍しいらしい。今まで見たことないとかいつている。

町の名前が分かった。皇都というらしい。国の名前は伽盧皇国。というか単語が日本語じゃないか。

それでなぜドイツ語？なぞは深まるばかりだ。

中央大陸の東に位置する国だそうだ。

冒険者になりたいと思って来たと話したらギルドというものを紹介してくれるそうだ。

名前を聞いたら、風霧明日香というらしい。女の子だ。

ハーフエルフなのになぜ日本名？となぞは増えるが無視することにした。

冒険者ギルドに入るとやはり痛い目で見られている…。

カウンターで登録をしようとしたら100ゾルかかると言われた。1万円くらいの価値らしい。

迷宮で敵を倒すと石みたいなものになつてたのをそれをゴブリンシャーマンに集めさせていた。魔石というらしい。それを差し出してみたところ、いきなり怒られた。

冒険者じゃないのに迷宮に入るのは駄目らしいのが分かったが、ひ

たすら謝ったところ許してくれた。
どこまで行ったのかと聞かれたので、中階層といったらまた怒られた。なぜ？

とりあえず、魔石で1000ゾルになったのでそれでギルド登録することになったのだが…。

血をカードにたらすことでギルドカードができるらしい。できたカードに載った職業が呪術師。まあ、そうだな。

そんな職業はないと言われた；；。

大きく分けて、この世界の冒険者の職業は5つある。

剣士、神官、精霊術師、魔術師、異能術師。

剣士は、その名の通り剣や槍、弓を使って戦う戦士。

神官には、回復専門の神官と、戦闘を行う武装神官、他の国では聖騎士とも言っそうだ。

精霊術師は、精霊を使って魔法を使う。エルフやハーフエルフじゃないと使えないようだ。

魔術師は、精霊を使わない詠唱をすることで魔法を使う。

異能術師 超能力者のことをいうそうだが、めったにいないというか見たことないそうだ。

普通の人は剣士になるらしい。素手で戦う人はいないようだ。

弓で戦う人も剣士になるのはどうだろう。だがなぞが増えたただけなので無視する。

ダークエルフには、呪術師がたまにいる！と嘘を付いたら納得してくれたのでよしとしよう。

第2話 初パーティ

ギルドランクというものがある。Fランクから始まり、Sランクまであるそうだ。

ランクが上がれば、武器や装備、アイテムを買うときの割引率があるという仕組みだ。

そして、迷宮以外のクエストもランクごとにある。

ただ、死亡率でいうと初心者と上級者が高いらしい。

初心者はいわずもなだが、上級者PTが下階層の最深部に行くとかなり強力な魔物と戦うことになる。

雷をまとった巨雷狼や、火竜に遭遇すると素早すぎる魔物で逃げる事も出来ず死亡することが多いとか。

そんなのとどうやって勝てというのかなぞだが、Sランクの中には倒したことがあるというすごい人もいるらしい。

魔剣とかで戦うそうだ。ただ、魔剣は上級者でもなかなか買えない値段らしい。

さらに下には最下階層というものがあるそうだが、Sランク専用のとても危険な階層らしい。

Sランクでもかくく死ねるとかいう階層だそうだ。どんだけだよ。

迷宮で戦うと地上で戦うより強くなれるそうだ。

詳しいことは不明なのだそうだが、迷宮の魔力にそういう力があるようだ。

ギルドランクについては、中階層にいるゴブリンシャーマンの魔石があったので3段階アップしてもらった。

つまり、Dランクだ。

ギルドの用も終わったので明日香さんにお薦めの宿を紹介してもらった。

火竜亭という名前らしい。なんかいつか出会いそうなことになるフラグなのか、これは？

見たこともないダークエルフということで最初は難儀しそうだったが、明日香さんの紹介ということで泊めさせてもらった。どうやらこの街では今後もここしか泊まれそうにない悪寒がする…。

長期滞在ということで1ヶ月分を払おうとしたが、朝食付きで1泊30ゾルで1ヶ月では30日で900ゾル…。

途中で買い食いをしてしまい、お金が足りないので10日分を支払った…。

明日も迷宮に行つて稼がないといけないようだ。

全体回復があるとはいえ、正直、魔物の攻撃は痛い…。防具も欲しいところだしなあ。

とりあえず、お風呂に入つて寝ようと思ったが、この世界にはお風呂はないようだ。

お湯を入れた桶を渡された…。しょうがないので、体をお湯で拭つて寝た…。

翌朝になつてよくよく考えてみた。

自分がダークエルフなのでまずパーティには入れてもらえそうになりこと。

自分の戦い方は相打ち狙いがメインで、傍から見ればおかしいこと。魔物とパーティを組んでいたら、まず自分が襲われるだろうということ…。

結論としては、昼間には迷宮に入れないな…。

真夜中にいくしかないか…。

どうせ迷宮は暗いんだし、昼も夜もないしなあ。

防具を買うまで真夜中で戦い続けました…。

一週間ほど戦ってそこそこお金も貯まったので、防具を買いに街にくりだしました。

やはり、痛い目で見られている…。これはボロボロになった服を着ているせいなのか？

まあ、そうだよなあ…。

普通の服だし、これ。攻撃されて穴だらけだよ…。

防具屋に入っているいろいろ物色してみると欲しいものはやっぱり高い…。

痛い目で店の親父が見ているので時間もかけたくない…。

つか、まずこのボロボロの服の代わりを買った方がいいんじゃない？

普通の服なら高くないだろ。と服を買うことにしました。

2万円くらい使ってしまった…。

着替えてから、また防具屋にきました。

なんか、痛い目で見られている…。

服のせいじゃないんじゃない？

でも防具買っしかないんだよなあ。

手元にあるのは50万円ほどで5000ゾル。
プレートメールで150万円とか高すぎだろ。

「つか、これきたら全体強化のスピードが意味ないじゃん。

やはり、革製なのか。鉄板入りとかいいよなあ。ガードできるし。
ということとで予算内ギリギリのを一つ買ってきましたよ。

色はもちろん黒色です。黒服が好きなのだ。

新しい防具を買っても仲間もない俺…。

試しに新しい防具を着てギルドの隣の酒場に繰り出しました。

ここで仲間でも見つけようか。ってとんがってる耳を発見した。

「エルフじゃね？でもダークエルフってエルフと仲悪いってラノベで見たよ、俺…。」

とエルフを見てたらいきなり目と目が合いました。

下手したら、やばいんじゃないかね、これ…？。

なんか立ち上がったよ。近づいてくるよ…。

「あんた誰？、何者？」

なんか聞いてきたよ、超上目線きたこれ…。

「見ての通りのダークエルフですよ」

これ以外なんて言えばいいんだよ、おれ…。

「職業は？」

「…呪術師です。」

「はあ？、なにそれ？」

「回復職ですよ、魔術も少し使えます」

ゴブリンシャーマンを捕まえて教えてもらったんだよ、ファイヤーボールだけだけど、てへ。

「こいつは、真夜中のダークエルフって言われてるんだよ、けっこう噂になってるぜ」

ツツコミが入ってきたよ。というか、なんで知ってるんだよ！

「なんで昼間に入らないのよ？」

おお、核心をついてきたよ。というかいえねーよ、魔物とパーティ組んでるとか。

「人気がないのが好きなだけですよ、じゃあ」

逃げるしかねー。つか、やっぱりパーティとか普通に組めないんじゃない、おれ…。

「待ちなさいよ！ちよつと付き合いなさいよ」

何に付き合つんだよ、逃げたいんだが…。

なぜか、パーティ組むことになったよ。

そして、迷宮の中階層にいる俺。

エルフはどうやら有咲希実香というらしい。
なんでエルフなのに日本名？

パーティは4人。

エルフと牙狼族と虎族で亜人パーティじゃね？

獣人2人は剣士で、エルフは精霊術師らしい。

狼が勝長、虎が謙信。つか、戦国時代？

苗字？名乗らないのでわかんねーよ。

「左80mにゴブリンの集団6人いるよ、シャーマンはいない」

「便利だな、その探知ってやつ、そっちに行くか」

狼やる気まんまんだな。虎はあまり口きかない。

「じゃあ、全体強化かけるよ」

「ひょー、こりゃいいや」

ゴブリン6人を駆り立てる狼と虎。

「つか、後衛2人やることねー。」

どうやら回復職は人気らしく、パーティに誘うのは難しいってことだったようだ。

全体強化で前衛無双でなにすればいいん？

「きたよ、これたぶん、ミノタウロスだよ、右斜め前60m」

またもや、定番の全体強化。

ミノタウロスやっぱつえー。2人がかりで競ってるよ。

自分も参戦したいけど、2人が邪魔で割り込めないよ。

あ、狼が一撃食らって吹っ飛んだ。調子乗りすぎだよ。

そこで自分が割り込んでみた。

1週間前よりスピードあがってる、レベルアップしてる、俺？

相手の大剣を避けながらザクザクと短剣を差していく俺。

面倒なので全体強化をやめて、意思を奪うことにした。

「動きを封じたよ、とどめ刺しちゃって」

狼が寝てたけど起きてきた。どうやらけっこう重症そうだが、死ぬほどじゃないだろう。

虎と出番がきたエルフの精霊魔術でダメージを当ててる。

ミノタウルスが倒れたので、全体回復を前衛2人にかける。

「やっぱり、回復職がいると便利だなというかさっきのはなんだ？」

「相手を拘束する魔術ですよ」

狼は陽気だが、虎はなんだか不機嫌そうだ。この術があまりお好みにあってない様子だ。

その後も戦闘が続いたが、二匹目のミノタウロスを倒した所で帰ることにした。

酒場に戻って飲んでると狼が話してきた。

「おめーがいると、超楽チンじゃねーか。なんで一人で真夜中に潜ってんだ？」

「一人の方が気楽でいいんですよ」

というかとどめをさすのが狼と虎とエルフに譲ってるから俺の出番

ないし、レベルアップしないんじゃない？俺。

「なんで不満気なのよ？」

やっと核心についてきたよ、エルフ。

「俺の力じゃねー。こういうのに慣れたら後々痛い目を見るぜ」

虎がいいこと言った。俺もこのパーティより一人の方が気楽でいいよ。

というか、俺ってパーティに合わないんじゃない？1人でも普通にやれてるし。

ミノタウロスなんて強くても馬鹿だからいい力モだよ。というかこの2人より気を使わなくていいし、

前衛として優秀なんだよ。ミノタウロス。

「じゃあ、自分はそろそろ宿に戻ります」

さっさと逃げよう。

「またパーティ組まないか？セージ」

「しばらくは、一人で潜ります、謙信さんもその方がよさそうですね」

「まあ、考えといってくれよ」

脱出成功だ。もう当分組まないよ！。

俺は宿に戻って汗を拭った。

パーティは気を使うし、あまりいいことないな。

そして、寝た。

第3話 スペルオーガ

3ヶ月、1人で真夜中の戦闘をしているうちに10階層ある中階層はほぼ制覇した。

ギルドランクもCにあがった。探知の範囲も100mから150mくらいまで広がった。

手にしている武器も短剣から双剣に変えている。

ダーククローエッジ、真つ黒な双剣で俺好みだ。

切れ味もいいし、まあ、魔剣なんてまだ当分買えんしな。

魔法も少し増えた。ファイヤーフレイム、ファイヤーボルト。

それぞれ、炎で広範囲に焼き尽くす魔術と炎と雷のファイヤーボール版だ。

コボルトシャーマンに中階層の10階層で出会ったので、手持ちの魔法が3つに増えた。

つか、なんで火ばかりなんだか。

ということで下階層に潜ってみた。もちろん、真夜中のソロだ。

できれば、死にたくないなので浅いところで当分我慢しておくつもりだ。

オーガを前衛にして戦っていたら、3階目でやばそうな奴がでてきた。

スペルオーガだ。向こうもオーガを前衛にして向かってきてる。

意思を奪おうにも時間がかかる。知力が足りないのか。

その間、スペルオーガはもがいていたが、意思を奪うのを諦めるとなにやら唱えてはじめた。

嫌な予感がして、前衛2人に盾になってもらった。

あとはダッシュで逃げた。後ろのほうで巨大な炎が燃えあがってる。

逃げ遅れてたらマジで死んでた…。全体強化のおかげだ。

ここらへんが自分の限界か…。

下階層3階目…。ここまでくると死ねる…。

とりあえず、このまま出口まで逃げよう。

そのとき、出口付近で爆発が起きるのを見た。

誰か戦闘してるんかい！

探知してみるとどうやら別のスペルオーガと5人PTが戦っているようだ。

近づいてみると1人倒れている。これは死んでいる。元々6人PTだったようだ。

他のPTの前衛もかなりダメージを受けているようだ。

スペルオーガの魔法に耐えるって魔法付与防具ってやつか？

全体回復を発動した。

上級PTならスペルオーガを追い込めるかも。

前衛のオーガが倒れたようだ。

全体回復しながらスペルオーガに後ろから飛び込んで首を狙う。

前からもPTの前衛が攻撃をしかける。

接近戦なら魔法を使えないだろう。、首に双剣が刺さった。そのまま掻っ切る。

さすが、切れ味がいいよ、この双剣！

首から血を吹きながら暴れるスペルオーガ。

一応、オーガだ。まとも攻撃を食らったら一発で動けなくなる。

タンカーじゃないしな、俺。

さらに首に双剣を突き刺す。さすがに倒れていくスペルオーガ。

「…、助かったよ、ありがとう。危うく全滅するところだった」

俺がダークエルフなのに驚いたようだが感謝された。

そのまま、出口まで一緒に行くことになった。

前衛の死体はこのまま置いていくことになった。まあ、冒険者って

のはそういうものだろう。

下階層を抜けるまでまだ2階層ある。でかい荷物は置いていくしかない。

2階層でしばらく回復してから、1階層に戻った。

実は、呪術師の全体回復は、神官のそれとは違う。

大量にMPを消費して一気に回復するのが神官の全体回復。

MPを消費しない代わりにじりじりと回復させるのが呪術師の全体回復なのだ。

それでもけっこうな速度で回復していくもんだが、さすが上級。HPがかなり大きいようだ。

回復速度も以前よりあがってるのだが、本職の神官にはさすがに負ける…。

中階層も抜けて、話ながら出口を目指す。

このPTは、前衛に剣士2人、後衛に魔術師2人、それに神官1人だ。死んだ奴は剣士だったのだろう。

バランスのいいPTだが、神官がMP切れだったそうだ。

「失礼ですが、なんであれで死ななかったの？そのプレートメールってやっぱり魔法付与防具とかだったりするのかな」

「そうだよ。2発防いだが、加護があつたので生き残れた。」

あの爆炎を2発も耐えたんか…。魔法付与防具恐るべし。

「死んだ奴の加護は防御向きじゃなかったしな、しょうがない」

「加護ってなんですか？」

「下階層にいくくらいなのに加護も知らないのか？神殿で加護を受ければ戦闘が楽になるんだよ」

「ずっと、ソロだったので知らなかったです…」

「うーか、それ知ってたら受けてるよ。なんだよ加護って。」

「その加護って選べるんですか？」

「選べるんだけど、具体的な効果は加護を受けてからじゃないと分からない」

選べるのに、分からないって微妙だなあ。

「その加護を受けるのってそれなりにするんですか？」

これが一番大事だ。

「下階層まで行ったらそこそこ金あるだろ、ってあそこでソロはないだろ、死ぬ気か？」

いいこと聞いた、さっそく受けよう。

「ずっとソロだったのでPT組んでないんですよ」

まあ、あそこでソロは確かに死ねるよなあ。意識を奪えないってもう駄目じゃん。

でも上級PTには入れなさそうだしな、まだCランクだし。回復職なら入れてくれるかなあ。

ダークエルフだから、それ以前の問題かもなあ…。

出口についたので別れることになった。

とりあえず、ギルドにいつて加護とやらを聞いてみよう。

第4話 加護

ギルドに着いた。さっそく話を聞いた。

加護を受けるには神殿や宗教団体に行く必要があるそうだ。

神には戦いの神やら豊穡の神、知識の神などいろいろいるようだ。

さっそく費用についても聞いた。1万ゾル…。手持ちのお金で払えるな。

だてに3ヶ月潜ってない。

加護を受けよう。ただ、これですっからかんになる…。

双剣も買っていたし、防具も定期的にメンテナンスするので維持費がかかるからだ…。

問題は、どの神にするかだが自分は神道なのだが、それでも加護受けれるんかな。

知力にも限界があるだろうし、戦いの神にするとしよう。

安全が第一だ。命は大事にしよう。

戦いの神はさすがに人気があるようだ。1週間かかるとか、とりあえず予約した。

それまで暇なのでまた酒場に通ってみた。3日目にまた以前のエルフを発見した。

3人PTだったのが1人増えてる。竜人の剣士のようだ。回復職はなかなか見つけれないようだ。

というか4人のうち剣士3人ってどんだけアグレッシブなPTだよ。竜人ってあまり見かけないんだが、ダークエルフと違ってそこそこはいるようだ。

というかダークエルフってどこにいるんだよ。

前にエルフに聞いたのだが、人間が嫌いで森に引き籠もってるくらいまではわかった。

中央大陸の6割が未開拓の場所だ。残り4割に国ができています。という、未開拓の場所にいますうだ。

魔力の歪によって、魔物がでるので魔力が強すぎるところには人は住めないらしい。

迷宮も魔力の強い歪によってできるそうだが、地上にも魔物がでて頻繁に冒険者が討伐依頼を受けてるそうだ。

若いほど迷宮の歪に影響されてレベルアップと共に体が軋むそうだ。成長期みたいなもんか。

自分はおっさんだけどダークエルフにしては若い方だと思っんだが、あまり実感がない。

少し体が凝った感じがする程度だ。

そういえば、クエストやらというものは受けたことがない。まあ、依頼主がびっくりするだろうしな。

ダークエルフだし…。

そうだ、PTだ。あれから3ヶ月くらいたってるけど、聞いてみよう。

「どうもおひさしぶりです」

「あら、真夜中のダークエルフさんじゃないの」

まだ、覚えてくれてたみたいだ。まあ、ダークエルフなんて自分しかないし。

「あれからどうしたんだ？」

狼の勝長さんだ。虎さんはあいかわらず無口のようだ。

「下階層に行ってたんですけど、こないだ死にそうになってました」
いきなりぶつちやけてみた。

「1人でいったんか？そりゃ、普通は死ぬだろ」

「まあ、うちのPTにまた入らないか？下階層にはまだいかないけどなw」

どうやらPTに入れてくれるらしい。

「正直、回復職がないと怪我したときに治療院行かなきゃいけないんで、それなりに金がかかるんだよ」

どうやら、軽症なら塗り薬で治すようだが、骨折とか大怪我すると治療院とかで直さなきゃいけないらしい。

そこにいけば金がかかるがさくつと治るそうだ。神官がぼったくりで儲けてそうだな。いいなあ。

魔剣ほしい、魔法付与防具とか…。

とりあえず、このPTを育てて下階層を目指すのを当面の目標にしよう。

自分もレベルアップしないとな。一人前衛で戦闘ばかりしてると筋力と俊敏さがあがって知力が上がってない気がする。

後衛に徹した方が知力はあがるのかな。よくわからん。魔法攻撃でもしてみるか。

一緒に迷宮に潜っているうちに1週間が過ぎた。

いよいよ、加護を受ける日だ。

戦いの神の神殿にいつてみる。

スサノオの神殿だ。回復職が戦闘するってどうよとは思うが、最後は自分頼りだ。

なんか簡単な説明を受けた。

魔方阵の中で瞑想すれば加護を受けられるそうだ。

とりあえず、座禅してみる。

魔方阵の外で6人くらいの神官がなにやら唱えている。詠唱か。

瞑想していると、加護の光がやってくる。

なんとなくイメージが伝わる。

戦いの光、守りの光、稲妻のような光、武狂う光など6つだ。

迷ったが、武狂う光を選んでみた。一番光が強くて選んでしまった。なんかのパワーアップか？

とりあえず、加護を受けた。具体的にはよくわからん。何の力だこれ。

そのまま、酒場についてPTに話してみた。

どうやら狂戦士の加護らしい。

「戦闘中に加護を発動させると見境なく暴れるから注意してよ！」

PT組んだらそりや意味ないわな、これ…。

加護は手動で発動なのか、なら安全だわな。

ただ、呪術師の狂戦士の加護は別な意味があった…。

第5話 呪術師の狂戦士

夜寝ようとしたらやたら体が軋む。加護のせいかな？
朝までずっと軋んでいた。

そして、筋力があがったようだ。体も軽くなった。眠いけど。これが狂戦士の呪いか？加護じゃないのか？

P.Tで中階層に潜った、支援してみたところ分かったことがある。

全体強化がまずい…。

力が暴れだしそうになる。それを抑えないと恐らく全体狂戦士になってしまうぞ、これ。

抑えこむのに疲れる…。

簡単にかければなしにはできなくなった…。

加護がなんで自動で発動するんだ…。

全体回復はそのままだった。

「この全体強化って前より強力になってるな、ずっと楽に戦えるようになったぞ」

狼は喜んでいるようだった。まあ、それならいいか。

全体強化が加護で強化されたせいか、中階層より下、つまりあの下階層にいきたくなくなったと狼がいいだした。

いやいやいや、あそこはまずいって…。

「あそこは3階層くらいからスペルオーガの少PTがいてやばいんだよ、強力な炎の魔法で上級PTの前衛が死んでたよ」

「それなら2階層までいってみるか」

狼やる気満々だ。虎はあいかわらず黙っているが、竜人とエルフは狼に賛成のようだ。

「それくらいなら大丈夫そうね」

「うむ、俺もかまわないぞ」

エルフも竜人のユーノもやる気だ…。

さっそく、潜ることになった。

下階層への入り口の階段で全体回復をかけている俺。

「みんな、回復終わったみたいだよ」

感覚的に竜人が一番HPが高いみたいだ。次に虎、狼、エルフの順だ。

さすが竜人だ。破壊力もあるし、中階層ではこのPTなら問題なかった。

ちなみに竜人は耐火能力が高いらしい。

肌が鱗なので防御力も高そうだ。顔は人間っぽい竜って感じた。

プレートメールを着込んでるのは、竜人と虎だ。

竜人と虎は、あのプレートメールを着てもかるがると動いている。

筋力が高めで余裕があるのだろう。

狼は革製の防具が好みようだ。このPTのダメージディーラーって感じか。

前衛のタンカー2人が両手剣で、狼が片手剣を両手に持っている。

エルフは短剣を使うが普段はしまつて手ぶらだ。それと、防具は革製だ。

「じゃあ、下階層にいくわよ」

やはり、いくのか…。

とぼとぼと階段を降りていった俺。

さっそく、探知をかけてみる。

オーガの少PTがいた。スペルオーガがここにはいないようだ。

オーガは歯ごたえがあるのか、狼が喜んで戦っている。拘束できるけどそのままでもいいか。

実は、魔物を拘束できるとこのPTには言っているが、意識を奪えるとは言っていないのだ。

言ったら警戒される恐れがある。危険なことは言わないほうがいい。俺が相手だったら絶対警戒する。ダークエルフだしなあ。

戦闘中に全体強化をかけてるが、暴走しないように抑え込んでる。疲れる……。

エルフは精霊魔法をちよくちよく使ってる。火系をかけている、やっぱり火系が一番ダメージがいいのかな。

戦闘を終わるたびに、全体回復をかけているが全体強化の疲れが残ってる……。

やはり、全体強化を無理に抑えてるのがきつい。加護なのに呪いだよな、これ……。

まあ、それでも効果があがってるようだけど。

二階層目についてみたら、なんかいた……。

獣系が単体だ。巨鎧熊というらしい。

でかいし手強い。エルフによると自己回復をする熊だそうだ。HPをひたすら削り取るしかない。

下階層ってやっぱりきついよなあ。ここでオーガなんかきたらやばいと思っていたら、早速探知で見つけた。

こちらに向かってきている。4匹のPTだ。自分はオーガ達の意識

を奪っておくしかない。

「右にオーガの少PTを見つけた！オーガは自分が抑える、こちらには全体回復をかけておく」

自分がオーガを始末するまで、4人には巨鎧熊と戦ってもらうしかない。

自滅させればいいんだが、それは秘密にしている。それに同時に意識を奪っておけるのは3匹までだ。

次にオーガのPTがきたら、危険過ぎる。早めにオーガを殺すことに決めた。

「全体強化にしてくれよ」

狼が文句を言ってるが、無理。

「あれは抑えるのがきついから自分が戦闘しているときにはかけられないんだ」

オーガ3匹の意識を奪う。

この能力にも加護が働いた。意識を奪うというより襲うような勢いで意識を乗っ取るうと力が発動する。

4匹目のオーガと戦闘になる。早く殺さないといけない。

狂戦士の加護で肉体が強化されたせいか戦闘力があがってる。強くなってるのが分かる。

巨鎧熊の攻撃力は高いようだ。タンカー2人ががんばってる。

その上、自己回復ってなんだよ、一匹なのになかなか倒せないよう

だ。

「オーガを始末したから、戻ってきた！こちらの魔物も拘束する」

それからはざくざくと一方敵を殺すだけだ、巨鎧熊は倒せたが、こちらもけっこうダメージを負ったようだ。

「あの熊は、さすがに強かったな、回復と拘束がなかったらやばかったぜ」

狼も下階層のやばさがわかったようだ。

戦闘後も、前衛に全体回復をかけ続けている。

このPTだと下階層は、自分がいなければ無理だったろう。回復職がいなかったのもあるが、拘束できないと魔物に挟まれて殺される。

そろそろ、下階層に入って3時間くらいたつ。

2階層は、魔物との戦闘中に別の魔物とぶつかりやすい。自分が前衛で戦うことも増えた。

狼は楽しんでいたが、もっと刺激がほしくなったようだ。

下の階にいききたいと狼がほざいた。

いやいやいや、この下って3階層だから！やつがいるから！スペルオーガが。

きちゃったよ、3階層…。

さっそく、中P.Tのオーガがいた。6匹だ。スペルオーガがいないようだ、よかったあ。

でもそのうちきつとくるよ…。

戦闘中に探知しているとさっそく、捕捉した。やつだ……。前衛もいる。まだ遠い。100mくらいだ。

「スペルオーガの少P.Tがいた！動きをとめるから全体強化を中止して全体回復に切り替える！」

全体強化をうち切って、久しぶりに意識を奪ってみる。動きを止めないとなればヤバいって。

前回は失敗したが、ここはやるしかない…。

加護が発動し、襲うような勢いで意識を乗っ取るうとする。

勢いに負けたのか、意識を奪えた。

ついでに、魔法をゲットしようとしてみる。あの爆炎の魔法だ。エクスプロージョンというらしい。

自分に使えるのかな、この魔法。

オーガたちは少しの間、4人にまかせよう。二匹目のスペルオーガがでてくるとも限らない。早めに一匹目を仕留めとく。

「スペルオーガは自分が仕留める」

「え？どうやって？」

エルフがいらんことを聞いてきた。

「不意打ちでエクスプロージョンを撃つ」

「そんな魔法、どこで覚えたのよ」

さらに、いらんことを言うエルフを無視した。

とりあえず、一人でこちらに誘導しているスペルオーガの少P Tに向かっていった。

不意打ちでエクスプロージョンを撃つつもりだ。

もうすぐ有効射程に入る。詠唱を開始する。これは死角からでも打てる魔法だ。

敵の足元から爆発を発動させる魔法といったところか。

エクスプロージョンを発動した。

普通なら死角にいる敵は発見できない、探知をもっている自分だけができる攻撃だ。

でかい炎の柱が立った。覇音だ。MPも一気にもっていかれた！。

探知したが、もう補足できなくなってる。死亡したようだ。

ヤバい魔法だよな、これ。オーガのHPを一撃で削るってどんだけだよ。

PTに合流したがまだ戦ってる。オーガが6匹いたがまだ5匹いる。

「仕留めてきたので、全体強化を再開するよ」

「全体回復にしてくれ、けっこうやられてるんだよ！」

狼のいうとおり、全体回復を発動する。

ちなみにここでエクスプロージョンを撃ったら味方も全滅してしまう。

どのみち、MPを一気に消費してしまったのであの魔法はしばらく撃てない。

探知しながら、全体回復を発動して、自分も双剣で斬り込む。

「魔法は撃てないの？」

エルフが言ってきた。いろんな魔法を持ってると思うてるようだ。4つしかねーよ……。しかも全部火系だ。

「さっきのでMPがもうほとんどないとうか、前衛で戦ってるからそんな魔法撃つ余裕もない、探知するだけで一杯だよ」

戦闘を開始して小一時間たっただろうか。戦闘が終了した。

「全体回復かけながら一旦戻ろう」

3階層で回復してたら危険だ。

さいわい、探知してみると入り口方面には敵がいらない。

オーガの中P.Tに懲りたのか、狼も戻ることに同意した。

2階層で休憩をとって、それから中階層に戻る。ここまでくれば安心だ。

無事に中階層、上階層も突破して、酒場に戻ってきた。

分前を分配している。

1人あたり2560ゾルになった。下階層は稼ぎがいいが分配するとやっぱり少なくなる。

しかし、スペルオーガの意識が奪えたのと新しい魔法を覚えられたのはうれしい。

ただ、さらに下の階層にはスペルロードとかいうのがいるそうだ。出会ったら死ぬな…。

今回は、スペルオーガを倒したということで全員ギルドランクがBになった。

ちなみに、俺はこないだ不意打ちで倒したので既にBだ。

「ギルドランクもあがったし、クエストを受けてみようかしら」

エルフがなんか言い出した。クエストって受けたことねーよ。どんなんだろ。

「クエストってどういうものなんですか？」

知らないものは知らない。素直に聞くのがいいだろう。

「冒険者なのにクエスト受けたことないやつって聞いたことねーよ」

狼が言ってるが、本当だからしょうがない。

「ギルドに行ってギルドランクごとに見合ったクエストを受注するのよ」

「だいたい、このレベルだと討伐系か護衛系かしらね」

なんとなくわかった。ラノベにでてくる普通のやり方らしい。

「そっいえば、あなたはレベルいくつなの？」

エルフが言っていることがわかるが、レベルなんて分からない。

「レベルってどうやって分かるの？」

「レベルが分からない冒険者なんて聞いたことねーよ」

狼がまたツツコミを入れた。

「ギルドカード見れば分かるじゃない。もってるでしょ？」

見てみた…。レベル、レベル…。どこだ？

「カードに念じると浮かびあがるのよ、人には分からないようになっているの」

おお、レベル見えた。レベルは46とでた。

「レベルは46でした」

「かなりレベル高いじゃない！私でも34よ。」

「いや、ソロでやってただけだし」

狼と虎がレベル37で竜人が38らしい。

それぞれ、下階層で戦ったので1か2くらいあがったらしい。

考えてみれば、呪術師の相手の意識を奪うという能力は、十分チートすぎる。

探知があるので複数の魔物PTに囲まれるってこともないし、余裕をもって敵に対処できる。

中階層の敵にはこれだけあれば勝てる。それをソロで稼げば普通の何倍も効率があがるのだ。

意識を奪えることは秘密にしているので、あまり突っ込まれたくない。

「まあ、あんな魔法使えるんだからそのくらいのレベルだと思ったわ」

エルフが納得してくれたみたいだ。よかった。

「明日はギルドでクエスト受けるわよ」

初クエストかぁ。楽しみだ。

解散して、宿に戻って寝た。

第6話 初クエスト

翌朝、酒場でPTに合流した。

まだ竜人のユーノがきてない。自分について聞かれたら、いろいろ
まずいことが多い…。

「そういえば、ダークエルフって珍しいけどどこからきたの？」

さっそく、エルフが聞いてきたよ。ここは、嘘をいって切り抜ける
しかない。

「それは、秘密なんだ。そう言われて里をでた」

「ふーん、呪術師ってあなたしか見たことないけど、他にもいるの
？」

おお、核心をついてきた。

「ダークエルフの里にはいたよ。それでも少ないけどさ」

ギルドにも言った嘘だ、これしか思いつかない俺…。

竜人がそのときやってきた。遅れてきたのはクエストを受注してき
たからだった。

迷宮の北の森で巨鎧熊が複数目撃されらしい。

その討伐が条件だ。3頭倒さないといけないとか。あれってかなり

強かったような気がするが、Bランクなのか？

さっそく街をでて北に向かうと城門が見えてきた。衛兵が立っている。

城門ってでかいな、というか街からでようとしなかったから外がどうなってるか初めて見る。

「外にでかけるのか？北の街道沿いの森に強い魔物がいるから今は危険だぞ」

「その魔物を退治してくるクエストを受けたの」

エルフがギルドカードを見せたら、通してくれた。

街道を進んでいくと森が見えてきた。けっこう、奥まで広そうな森だ。

というか、でかい森の中に街道が通っているって感じた。探すだけでも大変そうなんだが…。

「目撃された場所から探すわよ、右の森に入っていきましょう」

探知を発動するが、150mまでが限界だ。見つかるのかな。

「前方に狼っぽいのがいる。6匹だ。」

でかい狼がいた。3mくらいある。これって普通のPTならやばくね？

「3匹は拘束した、全体強化をかける」

戦闘が始まった。噛み付いてくるだけだ。火とかは吐かないようだ。前衛3人が狼を切り裂く、肉質が柔らかいので攻撃しやすそうだ。

6匹全部を始末したが、迷宮の魔物とは違って魔石にはならないようだ。

そのあと、2度ほど魔物と戦闘をした。

討伐対象ではないが、魔物を狩ると報奨金が貰えるらしく、部位をはぎとって進んだ。

エルフが足跡を見つけたようだ。足跡を辿っていくと水場が見えた。

なんかいる……。2匹だ。もう1匹はどこだ？

「水場に2匹、目標の巨鎧熊だ。拘束した」

水場にたどり着くまでに意識から残り1匹の場所を探ってみた。

どうやら狩りに出かけてここに帰ってくるようだ。3匹目の足跡を見つけたので跡をつければいいか。

このまま殺すことにした。2匹動きが固まっているところを全員でざくざくと刺していく。

我ながらシユールな戦闘だよな。

討伐の証拠品として、牙と右手を持っていくことになった。

残り1匹を追う。

「たぶん、足跡があるのでこっちにいますよ」

さりげなく誘導してみた。能力を疑われるのはまずい…。

程無く、こっちに向かってくる巨鎧熊を探知した。

「最後の1匹がいました。拘束します」

そして、またざくざくと以下略。

「これでクエスト達成ね、さっさと戻りましょう」

帰り道は戦闘もなくギルドまでたどり着いた。

実は、でかい狼の死体にでかい狼が10匹群がっていて、死体を食べていたのを探知して避けたのだがやばそうなのはそれだけだった。

あれを10匹はさすがに無理だ。というかあつちを討伐したほうがよくね？

さすがに、金より命がおいしいので、無理はしなかった。

報酬を貰い酒場で分前を貰ったけど、迷宮で稼いだほうが金になるし経験値も稼げるしよくね？

「クエストより迷宮で戦ったほうが自分には向いてるみたいですよ」
ぶっちゃけてみた。

「確かに拘束あると討伐クエストはつまらん」

「本当は、厳しいクエストのはずだったのよね、これって。次からは迷宮だけにしましょう」

狼とエルフも同意したので、次からは迷宮に行くことになった。

第7話 新しい魔法

宿に一旦戻ったが、寝ないで夜中になるのを待った。

自分には目的があつた。

新しい魔法の入手だ。

ギルドで教えてもらった情報によると、

魔法を手に入れるには魔導書を買う。でも高いらしい。

魔導院で教えてもらう。学校みたいなところらしく、時間もかかるし金もかかるらしいので却下。

魔術師の弟子になる。これもただでは教えないだろうし、魔導院と同じで却下。

残された道は、スペルオーガに教えてもらうってことだけだ。

ひさしぶりの真夜中のダークエルフになった。

まずは、中階層のコボルドシャーマンを見つけるところからだ。

9、10階層くらいにいそうだ。

3匹捕まえて教えてもらったところ、新しい魔法は、スリープ（睡眠）、バインド（1分間拘束）、レジスト（魔法耐性）だ。

炎系以外の攻撃魔法はもってないんかい！

スリープとレジストは微妙だが、3匹までしか意識を奪えないし、

バインドは重宝しそうだ。

レジストは発動した魔法を打ち消す魔法だ。

ファイヤーボールならレジストできそうだが、エクスプロージョンはできそうもないって感じの魔法だ。

とりあえず、3匹は殺して、下階層へと降りていく。

1階層はソロで余裕だが、2階層となるとオーガの少PTが多くて早速、バインドの魔法を使うことになった。

相打ちとバインド、なかなかいい。

三階層にいいよ降りていった、オーガの中PTがいるのでやつかいだ。ただ、二階層ほどPT数は多くない。

いきなり、探知した。向かってくるオーガ6匹だ。3匹の意識を奪い同士討ちをさせる。スペルオーガはいない。

相打ちさせると残りのオーガがいるので最後の始末は自分でしないといけないのが面倒だ。

次のPTは素通りし、3つ目の少PTにスペルオーガはいた。4匹。スペルオーガは少PTが多いようだ。

やっと捕まえられた。3匹の意識を奪い4匹目を始末させ、あとは、スペルオーガを残して相打ちさせた。

1匹オーガが残ったが始末し、スペルオーガを1階層まで連れていけばいいだろう。

2階層では、2匹しか新たに意識を奪えない。1匹すでにスペルオーガがいるからだ。

少PTが多いのをくぐり抜けないといけない。バインドを使う。1分間で殺さなければいけないのでオーガの首を狙う。

なんとか凌いで1階層に戻れた。スリリングすぎる…。
バインドを教えてくれたコボルトシャーマンありがとう。殺しちゃったけど。

1階層でいよいよ教えてもらう。

ポイズン（毒の状態異常）、パラライズ（麻痺の状態異常）、サンダーウェブ、ブラスト、サンダーストーム、コキュートス。
6つの魔法を手に入れた。さすが、スペルオーガ。

ポイズンは微妙だ。正直使えない。

パラライズは、単一麻痺魔法だ。バインドよりも麻痺の方が使えるかも知れない。

サンダーウェブは麻痺属性付きの雷系全体魔法なので重宝しそうだ。
ブラストはファイヤーフレ임よりも強力だが火系単一攻撃魔法だ。微妙だ。

サンダーストームとコキュートスは強力な雷と氷の全体魔法だ。自分のレベルとMPで撃てるかどうか試してみる必要がある…。

最後に、スペルオーガは始末した。ありがとう、スペルオーガ。

無理は禁物なのでこれくらいで引き上げるとしよう。

明日は、PTがないのでゆっくり寝れる。

迷宮の外にでたら朝になっていた。

第8話 火竜

起きたら昼過ぎだった。

とりあえず、ギルドで昨日の魔石を換金する。3860ゾルになった。

PTの2倍弱か。まあ、目的が魔法取得だったからおまけみたいなものか。

でもなんか騒がしい。

緊急招集とかいってる。

自分には関係ないと思ってギルドをでようとして捕まった…。

火竜が地上で目撃されたらしい。

回復職が必要だとかで、全体回復持ちの自分が目を付けられたようだ。

それも長時間維持できるということもバレてる。

上級魔法が使えるところまで…。エクスプロージョンか。

緊急招集から逃げるとギルドから強制退会させられるらしい。

もはや、逃げられない…。

誰だ、自分の能力をギルドにばらしたのは？

狼が犯人と見て間違いない。

広場まで連行された。

火竜と戦いたくない…。

S、Aランクを招集しているようだ。
もう、諦めた。とっとと終わらせて欲しい。

だんだん、賑やかになってきた中でぼつんとしている俺。
火竜と戦うとすれば使えるのは上級氷攻撃魔法コキユートスか。
昨日覚えたばかりで撃てるかすら分らない。

そんなことを考えていると声をかけられた。

「こないだのダークエルフじゃないか、お前も上級だったのか」

この前、助けたPTのプレートメール着た前衛のようだ。

「いえ、回復職として来たので上級じゃないですよ」

「神官で呼ばれてるのは、Aクラス以上だぞ」

「神官じゃないです…」

「神官以外の回復職ってないだろ？」

「呪術師です…」

「そんなの聞いたことないぞ？」

説明が面倒だが、無視するわけにもいかないしなあ。

「全体回復に特化している回復職なんですよ、だから中級でも呼ばれたんです」

「どのくらいの能力かわからんな、すごいのか？」

「半径150mの味方全員を常時回復させることができます」

「めちゃくちゃすごい能力じゃないか」

「そろそろ、呼ばれるみたいですよ」

職業ごとに分けられるようだ。広場にはもう50人ほど冒険者がいる。

こんな人数で大丈夫なのか？

このうちSランクってどのくらいいるんだろうか…。

回復職が呼び出されたので行こうとしたら、お前は向こうだと言われた。

そこは魔法職の場所じゃないか…。

「お前は、上級魔法を撃ってMPがなくなったら回復職の陣地ではなく前衛後方中心に移動しろ、前衛の150m以内だ」

もはや逃げられない。狼め、死んだら恨んでやる。

「魔法職で上級魔法を撃てるのはどのくらいいるんですか？」

「お前を入れて今は4人だ、先月1人死んだ」

「コキュートス以上の上級魔法はありますか？」

「氷魔法の最上級がコキュートスだ。お前は撃てるのか？」

「覚えていますが、撃ったことはないです、中級じゃどうせ撃つ相手がいないし」

「これでコキュートスを撃てるのはお前を入れて3人になった」

1人撃てないのかよ！まあ、自分も発動できるかどうか分からんけど。

「早く持ち場に行け！」

魔法職の場所には12人いた…。誰だ覚えてない奴は？
ちなみに神官は8人くらいいる。残りが剣士だろう。

隣の魔法職に聞いてみた。人間の女の子だ。

「神官が少なすぎないか？」

「冒険者の神官自体が少ないのよ、上級者となるとあのくらいでしょ、というかなんでダークエルフ？真夜中のダークエルフってソロと聞いたけど、なんで魔法職にいるの？前衛ならもつと前よ」

「最初はここから魔法を撃てと言われたんだよ」

「魔法術師がソロなんて、あなた馬鹿でしょ？」

「回復職なんだよ」

「だったら、あっちよ」

「魔法も撃てるんだよ、もう出発だぞ」

そろそろと西に向かって進んでいった。どうやら西の城門に向かっていくみたいだ。

「なんの魔法を撃てるの？」

「コキュートスだよ、それに火竜なんて下階層の魔物だろ？なんでこんなに集まってるんだ？」

「どこで覚えたのよ、そんなの！それと火竜じゃなくて火竜亜種よ。最下階層にいる覇竜よ」

聞いてねーよ！無茶苦茶強いじゃん。それ。

城門をくぐってどんどん西に向かっていく。西の森が燃えているのが見える…。あそこなのか。

森の入口で止まった、ここで待機らしい。そうすると、覇竜らしきものがこっちに向かってきている…。でかい！

詠唱が始まった。上級魔法は有効範囲が広い。俺もコキュートスの詠唱を始めた。

詠唱が終わった、魔法が発動する。MPが一気に持ってかれた！エクスプロージョンよりもMP使うのかよ。

3発のコキュートスと1発のサンダーストームが覇竜に撃ち込まれた。

続いて中級魔法が撃ち込まれていく。

空を飛んでいた覇竜が地面に落下する。前衛がそれを迎え撃った。

自分も前衛の後ろに移動し、探知で30人の前衛を補足する。
全体回復を発動した。

竜は麻痺状態になっている。誰かサンダーウェブかパラライズを撃ったんだろう。

次々と剣が打ち込まれる。

これだけ入ればいくら何でも楽勝じゃね？

傷ついた覇竜が火を吹いた、一気に前衛が飲み込まれた。

俺は残り少ないMPでパラライズを撃った。

魔法が飛びかい覇竜はまた麻痺状態になった。

神官の詠唱が始まった。8人って少なすぎるよ。前衛30人いるんだし。

最初の一撃で死んだ前衛はさすがにいないがHPがかなり削られている。

前衛は、それでも必死で剣を打ち込んだ。

覇竜が叫び声をあげ、尻尾を振り回しながら倒れていく。

前衛が巻き込まれて何人かふっ飛ばされている。

覇竜は死んだが、前衛で死んだものは5人だった…。ふっ飛んだ際に死んだようだ。それが探知で分かっていた。

戦闘時間は10分に満たないだろう。それでも死者がた…。全員

Aクラスだったそうだ。

ふと、ギルドカードを見た。レベルは54になっていた。

第9話 死の実感

死者はギルドの職員によって運ばれた。

生き残った冒険者には、報奨金が出された。1人4000ゾル。俺は2つの職業分で8000ゾルを受け取った。

明日またギルドにくるように言われた。

そして、俺はAランクになった。

ギルドを出てると、もう夕日が沈む時間になっていた。俺は自然と酒場に向かった。

これはもう習慣みたいなものだろう。

狼たちがいた。霸竜のことを聞きつけたのだろう。

竜人はいなかった。狼、虎、エルフの3人だ。

「今日はすごい事件があったらしいじゃないの」

「あなたも参加したんでしょ？ダークエルフが活躍したって聞いたわよ」

「俺は後ろで魔法を撃ってただけだよ」

「上級魔法のコキユートスを撃ったそうじゃない」

「俺が上級魔法を撃てるの知っていて、それで呼ばれたので撃っただけだよ」

狼を見たら、頭をかいていやがる。

「悪いな、つい口をすべらしちゃったんだよ、悪気はないんだぜ」

「魔術も回復もすごいダークエルフがいるって噂になってるわよ」

あの能力がばれるのはまずい。有名になったら他の国にいくしかないかな。

「正直、あまり噂されるのは困るんですけどね」

「なんでよ、いいじゃない。有名になったら仕事も金も増えるんじゃない？」

金は欲しいが、公で仕事するとなるとあの能力をみせたくない。だが、あのチート能力が使えなければ、俺の戦力はガタ落ちだ。

「迷宮で戦うのが好きなので、やることは変わらないですよ」

そういえば、明日ギルドに呼ばれているのってなんでなんだろう。凱旋か葬儀でもするのかな。

「今回は、死んだ人もいるしあまり喜ぶ気にもなりませんけどね」

「5人も死んだそうだな、Aランクになったら呼び出されるんじゃない前衛は損だな」

「それなら、今回の件で俺もAランクになりました、明日もギルドから呼び出しを受けてますよ」

「それじゃ、明日はPTはお休みね。それと、今日はお祝いをしな

くちやいけないわね」

「おう、今日は俺の奢りだ！たくさん飲んで食べ！」

狼はあいかわらず陽気だが、俺はそんな気分じゃないんだけどな。探知で人が死ぬ瞬間を感じたんだ。

「今日は疲れました、早めに寝ますよ」

俺はそのまま、宿に帰って寝た。

第10話 脱出

翌朝、早めに起きてしまった。

そういえば、ギルドにいかないと行けないんだっけな。

朝食を酒場で食べることにして、宿を出た。

ギルドに入ると、雰囲気がいつもと違った気がした。

嫌な予感がする。

受付の女の子に名前を告げると奥に入ってしまった。

なにやらおっさんが出てきた。ギルドマスターらしい竜人だ。

「セージさん、今回はかなりの活躍をされたそうですね」

「前衛の人達のほうが大変だったと思いますよ」

「どうもあなたの噂を聞いて、この国のお偉いさんが会いたがってるんだよ」

俺は会いたくない、嫌な予感が当たった。

「これをもって皇宮に行って貰いたい。クエストみたいなもんだ。報酬を出すよ」

もう後がない、これを受けるのはどうみてもヤバイ。
嫌な予感しかもうしない。

「このクエストを受けないとどうなるんですか？」

「この国にはもういらなくなるだろうな」

やはり、もう出ていくしかないか。

「それでは、いままでお世話になりました、他の国にいきます」

頭を下げてギルドを後にした。

追手がかかる前に脱出しないといけない。時間がない。

宿に急いで戻って、そのまま北の城門に走っていった。

「これからでかけるのか？身分証をだしてくれ」

どこから見てもダークエルフなのにはれてない。間に合った。

「これがギルドカードです」

「分かった、通っていいぞ」

皇都からは抜けたが、まだ追手がかかる可能性がある。

回りこんで南から抜けよう。

北の街道を外れて森に入っていた。途中で出会う魔物はやはりでかい狼だった。5匹だった。

3匹の意識を乗っ取って同士討ちさせる。そして止めをさして終わる。

そのまま森を走る。探知は忘れないで警戒している。

出会う魔物はみんな同士打ちだ。単体の魔物は意識を奪ってそのまま殺す。

ただここでも一角ウサギだけはやっかいだった。探知にひっかからないで突っ込んでくる。

スライムはいなかった。

南の街道にでた。ここから南にあるアルノール共和国を目指すことにした。

第1話 新しい街

何も用意しないで出てきてしまった。

正直、困った。

食事には困らない。食べそうな魔物を殺してファイヤーボールで焼いて食べた。

南の街道も森が続いている。

このままいけば、街に出られるだろう。

野宿がやばいことにすぐ気づいた。地面に寝るのは魔物が襲ってくるのでまずい。

とりあえず、探知をかけながら木の上に登って目を瞑っているしかない。

ウサギよけにはなる。

ほとんど寝ない日が続く。

走りながら南を目指す。レベルが高いせいか体は軽い。

全体強化すればもっと早く走れるが暴走を抑えるのに疲れるからだめだ。

走りながら一週間で次の街に着いた。

ここはまだ伽盧皇国の中だ。でも限界だ。この街で一泊するしかない。

恐る恐る城門をくぐった。

「この街になにか用か？」

「冒険者です。ギルドカードもあります」

「1人で皇都からきたのか？どうやってきたんだ？」

「Aランクですから魔物なんて普通の動物みたいなものですよ」

「そうか？まあ、入っていい」

怪しさ満開なのにとりあえず入れた。

お金はある。宿に泊まろう。とりあえず、眠りたい。

宿を探したが、ダークエルフだとなかなか泊めてもらえない…。

やっと泊めてもらえる宿が見つかった。和泉亭って宿だ。

前払いでお湯を貰って体をぬぐってから寝る。

一日でここを出るということも話した。

後は、もう知らん。寝た。

朝になった。早くここを出たい。

南の城門に行ってみた。

「でかけるのか？身分証をみせろ」

「冒険者です、これがギルドカードです」

「うむ、通っていいぞ」

完全スルーだ。

宿で次の街までの距離も聞いた。走って4日くらいだ。

なんでこんな目に会わなきゃいけないんだと思うがしょうがない。

結局、アルノール共和国にたどり着いたのは皇都から出て3週間後だった。

そこから護衛のクエストを探して、街から街に移動したので楽しかった。

ダークエルフというのは怪しいが、Aランクというのが効いた。

このノワールという街に来たのは、迷宮があるからだった。

北の国にいなかったのは、そこはトルメキア帝国だったからだ。

皇帝とかいるのがまずヤバい。また同じ目には会いたくない。

この国は共和国だから、ヤバさは低いだろうという考えだ。

民主主義バンザイ。

まずこの国は半島になっている。それと島国を含んだ中央大陸南部の国だ。

伽盧皇国と共通言語だから問題ないだろう。ドイツ語だ。なぜかはわからない、それは謎だ。

とりあえず、宿を探した。Aランクだから多少高いところでもかまわない。

ダークエルフでも泊めさせて貰えたのはイシュタル亭という宿だ。

1ヶ月分を前払いした。あとは、冒険者ギルドに行く。

情報を仕入れないとどうにもならない。

迷宮の構造は、とにかく広い。

それが階層になっている。

4階層になっているのは同じだ。

伽盧皇国の迷宮より規模が大きくなった感じだ。

そこまでは事前に調べた。

あとは、細かい情報だ。

どうも、魔物の種類は基本的に同じようだ。
Aランクなら3階層までいける。
違うのは1階層12階だ。

広さも深さも規模が大きい迷宮になっているようだ。

PTに入るのはもう懲りた。ずっとソロでやると決めている。
後は、目立たないようにするだけだ。

酒場にもいかない。

ギルド以外は冒険者が行かない場所でおとなしくしていることにした。

今の問題はMPが足りないことだ。上級魔法が1発しか撃てない。
まめに魔法を使っていこう。

そうすればMPも増えるだろう。俺は魔法使いになる。呪術師だ
けど…。

それと武装の強化だ。やはり、魔法剣が欲しい。防具は革製だから
魔法付与とかしてもあまり防御力は変わらないだろう。

第2話 スペルロード

真夜中になった。

P Tのときには、ランタンとか使っていたがソロならいらぬ。ダークエルフは夜目が効くからだ。

むしろ、あれは魔物に見つけてくれという目印じゃないかと思ってる。

多少暗くても問題ない。探知もある。

とりあえず、1階層に足を入れた。相変わらず、この階層は探知が効かない知能の低い魔物がでるから嫌いだ。

スライムや一角ウサギ、大トカゲをあしらいつながら進む。

1階層の11階でやっと目当てのものを見つけた。ゴブリンシャーマンだ。

魔法を教えてもらうことにするが、目新しい物がない。ハズレだ。

12階でまた捕まえた。今度は新しい魔法が手にはいった。

ダークネス（視力を奪う）

微妙だ。バインド、パラライズの方が数段便利だ。さすが、ゴブリンシャーマン。使えねー。

2階層に入った。

ここではコボルトシャーマンを見つけることにする。

いない…。

12階まで行ってもコボルトシャーマンいない。コボルトはいた。

今日はハズレだ。

3階層に期待する。ここからは油断するとヤバい。以前の迷宮は4階から下には降りたことがない。

スペルオーガを見つけた。やはり3階にいた。

さっそく教えてもらおうか。

マジックドレイン（MP吸収）

をゲットした。かなり使える魔法だ。さっそく使ってみた。MPが補充された。いいものが手にはいった。うれしい。

それでは4階まで降りてみる。ヤバい。ハイオーガがいた。意識は奪えた。パワーがオーガとは段違いだ。

5階まで降りたが、ハイオーガが中PTでいる。ヤバさが倍増した。バインド、パラライズを多用する。

ハイオーガにマジックドレインをかけてMPを補充した。やはり、マジックドレインは使える。

6階まで降りた。ハイオーガにまじって、オーガロードがでてきた。意識は奪えるがそろそろヤバそうだ。バインドでは殺せない。パラライズを多用する。マジックドレインもかけてMPを補充する。

7階まで降りた。オーガロードだらけだ。それも中PT。普通のソ

口なら軽く死ねる。次の階は嫌な予感しかしない。

8階まで降りた。ヤバいやつがいた。スペルロードだ。意識が奪えない…。レベルが足りないのか…。

パラライズもレジストされた。打つ手がない。エクスプロージョンをぶちかまして7階まで逃げた。

地上まで上がった。問題はスペルロードだ。8階を攻略できない。その下も駄目だろう。

というか、ほんとに、Aランクって8階を攻略できるんか？呪術師の能力があっても無理だぞ。

朝日を浴びながらとぼとぼと宿に帰った。

第3話 Sランク

1ヶ月がたった。レベル65に達した。いまだにスペルロードを攻略できない。いい方法はないだろうか。

それと、酒場に行かないので、よく分からないがどうやらここまで自分の噂が伝わってきたようだ。

ギルドでPTに声をかけられるようになった。バレているとは思えない。逆に聞いてみた。

「回復職ってなんで知ってるの？」

「覇竜を相手にコキユートスで撃ち果たし、30人の剣士を回復させつづけた凄腕の冒険者って聞いたわよ。3階層をソロで倒せるほどの戦闘力をもってるっていう話もあるわね」

「そんなに強くはないですよ」

「でもギルドにスペルロードの魔石を持ち込んでるって聞いたわよ、あれは3階層でも最強クラスの魔物だわ」

「エクスプロージョンで力技で倒してるだけですよ」

「それって火系上級攻撃魔法じゃない、Aランクの魔術師でもほとんど撃てる人はいないわよ」

だめだ、これはもうどうにもならない。だが、ここから逃げるにもあとは西の国しか残ってない。

「それでうちのPTには入ってくれるの？歓迎するわよ」

「まだ弱いのでソロで鍛えているところなんですよ、しばらくはこのまま鍛え続けてますよ」

「あなたが弱いつて言うのは、皮肉にしか普通は聞こえないわよ。まあいいわ、気が向いたら声をかけてよね」

なんでこうなるのかな。ひっそりと暮らしていたのに。もう、迷宮にずっと籠り続けたい…。

まあ、ギルドからへんな呼び出しはないし、気にしてもしょうがない。

防具でもみてこようか。気になるのがあるんだが、高いんだよね。

それは知力アップの魔法付与防具だった。革製防具なのに3万ゾルもするってどんだけだよ。

「お客さん、それが欲しいのかい？」

「うーん、高いから買えないんだよね。革製防具って使い捨てじゃん」

「魔法付与防具は専門の職人にだせば補修してくれるよ」

「でも革製なのに高いよね」

「魔術師は布製防具を使うからそれは人気がないんだよね、買う気が

あるなら安くするよ」

「どのくらいになるの？」

「お前さんはAランクだな、それで3割引になるところを、4割引でどうだい？それでも採算ギリギリだよ」

「知力アップでどのくらいあがるの？」

「+10はあがるね、こんなにあがる防具はなかなかないよ」

「じゃあ、買うよ、なんかおまけ付けてほしいな」

「おまけっていうとなにが欲しいんだい？」

「黒く染めて欲しいんだけど。明るいと迷宮で目立つんだよ」

「それなら染めるのに1週間待ってくればできるよ」

「じゃあ、決めた。買う」

8階層の攻略を進めているうちにお金が貯まっていたので実は定価でも買えたのだ、ちょっとうれしい。

1週間後、防具を受け取って真夜中に潜ってみた。

3階層8階へ降りていった。オーガロードを倒していると、オーガ

ロードの少PTにスペルロードがいるのを見つけた。

さっそく意識を奪ってみる…。やっとな奪えた。魔法付与防具すごい。大金を払った価値があった。

それでは、スペルロードから魔法をゲットする。

マインドゼロ（MPを0にする）、グラビティ（動きを止める）、ヘイスト（俊敏さをあげる）

マインドゼロは使える。スペルロードを無効化できる魔法だ。グラビティはパラライズの上位版か。

ヘイストは微妙だ。

残りのスペルロードを探知とマインドゼロで無効化いけばいいんだが…。マインドゼロは3発しか自分のMPでは撃てない。マジックドレインと併用で使い物になる魔法らしい。

スペルロードはなんとか突破できる。あとはオーガロードを倒せば敵がいない。

同士討ちで倒せる。やっとな8階を突破した！

9階まで降りていく。スペルロードのいる中PTが多い。もう鬼だな、この階。

でも8階を突破した俺にはもうただの作業だ。探知とマインドゼロ、マジックドレインでスペルロードを駆逐し、オーガロードで同士打ちをする。

10階へと降りていく。オーガロードがいなくなってる。嫌な予感がする。急に迷宮の道幅が広くなった。

この階層を進んでいくと、森にもいた狼の魔物が現れた。いきなりの難易度低下である。

同士討ちとパラライズで仕留めていくと、でかいやつを探知した。見覚えがある。

竜種だ…。霸竜ほど大きくない。火竜だろう。

意識を奪えるのか？試したところ、スペルロードよりは簡単に奪えた。がくっ…。

ざくざくと双剣で攻撃し、時間がかなりかかったが殺せた。

こんなんでいいのか10階？

11階に降りていった。火竜2匹だった…。あとは狼の魔物だ。火竜を相打ちさせて生き残りをざくざく…。

なんか最後には骨のあるやつと戦いたい。

12階に降りていった。いたのは、火竜2匹と巨雷狼というやつだろうか。

雷を纏った狼のようだった。やけにレジスト能力が高く探知すらもできない。そうすると意識も奪えない。

グラビティもレジストされる。常時、レジストかよ！

ただ、火竜が2匹いるので相打ちさせた。

火竜がいなかったらやばかった。

結局、一番やばかったのはスペルロードだけだった。

巨雷狼は単体だったら相当やばかったろう。火竜がいてくれたから倒せたようなものだ。

地上にあがったら、朝日が登りきっていた。

とりあえず3階層は制覇した。

ギルドにいき換金した。4階層はSランク専用ということで自分はいれない。

窓口の女の子に聞いてみた。

「3階層を全部クリアしたんですけど、4階層っていけるんですか？」

「あの巨雷狼も倒したんですか？」

倒したのは火竜だよ。でも言わないでおいこつ。

「倒しましたよ。火竜も巨雷狼も全部」

「魔石も換金しました」

「確かに巨雷狼の魔石ですね」

「ちょっと待ってください」

奥に入っただけだ。おっさんができた。ギルドマスターの竜人だ。なぜここも竜人？

「あなたが噂のダークエルフですか、私はこのギルドマスターをしているウォズニックというものです」

嫌な噂なんだが、ギルドが漏らしたような気がしてしょうがない。個人情報を守れよな。

「魔石も確認しましたし、あなたをSランクに認定します」

カードを更新してもらった。

「4階層はSランクでも死亡者が多いので気をつけてください」

一応聞いてみた。

「巨雷狼が苦手なんです、4階層にもいますか？」

「もちろんいますよ、うろつろしてます」

その時点で俺は詰んでるんだが…。

他にも魔物がいてくれることを祈るしかない。

「あれって殺すのが大変なんです、弱点ってありますか？特に、魔法で効くものとか？」

「火属性の魔剣に弱いですよ、魔法には私も詳しくはないのでなん

とも言えないですね。上級魔法ならレジストをやぶれるんじゃないですか」

上級かよ、1発しか撃てないんだよ。魔剣買えってことか。

「防具も治したいんですが、革製の防具を治せるいいお店ってありますか？」

「この街の東の方に、シルビアという腕のいい職人さんがいますよ。あと、Sランクになると強制的に受けさせられるクエストも出てくるからね」

「クエストは嫌いなんですよ、迷宮で戦うのが性に合うのでなるべくなら受けたくないですね。それにソロなのでSランクのクエストは無理だと思いますよ、PT組んでる人にしてください」

「むーん、一応考えとくよ、それでもソロ向けのは受けてもらうよ」

「わかりました」

Sランクは面倒そうだ。

魔剣を買うのに3階層で稼がないといけないのか…。

とりあえず、その職人さんを探すことにした。

いきたくないが、酒場にいつて聞いてみるか…。

とりあえず、店員さんに聞いて場所を教えてもらった。

「真夜中のダークエルフじゃないか、調子はどうだい？」

フレンドリーなドワーフだ。あまりここには居たくない。

「悪くはないですよ」

「覇竜はどうだった？見たことないんだがやっぱりすごいのか？」

知らんがな、まあ、適当にあしらっておこう。

「後ろで見てただけですから、ものすごくでかくて強いってことしかわかりませんね」

「でもお前さんがその覇竜を倒したんだろ？」

「俺は後ろから魔法を撃っていただけで倒したのは前衛の剣士達ですよ」

「そうか、聞いていたのと少し違うなあ」

どんな噂が流れてんだよ、もう帰るよ。

「それじゃ、用事があるので帰ります」

とつとつ、酒場を抜けた。ここは面倒くさい当分こないことにしよう。

とりあえず、宿に帰るか。防具は修理に出すとしてしばらく潜れなくなるからもう少しやれてからでもいいだろ。

そして、宿に帰って寝た。

第4話 遭難者

夕方起きて、宿で飯を食っていると女将のシルティさんにいきなり言われた。

「あんた、Sランクになったんだってね、すごいじゃない」

いきなりバレてるよ、ギルドの情報だだ漏れじゃないか。

「お祝いにこの飯代は、ただにしてあげるよ」

護衛の任務でもしてゆつくりしたいけど、魔剣代を稼がないといかんしなあ。

武器屋に行つて、相場をみてみよう。

「腕のいい武器屋を知らないですか？」

「それならこの街の東にグランって人がお薦めだよ」

東にその手の店が集まってんのかな。

お礼をいってグランって人の武器屋に行ってみた。

やはり高い…。それに、両手剣が多くて、双剣の魔剣は少ないなあ。双剣人気ないんか…。

魔法付与防具とあまり変わらない値段なので当分は無理だね。

武器を研いでもらって潜ることにした。

この迷宮に来てから、わかったことが一つある。

遭難者に出くわすのだ。迷宮の規模がでかいからなんだが、面倒な事が増えた。

日が沈んでから潜る俺は救助隊みたいなことをしている。

いちいち、地上まであがるので効率が悪い…。

でも、人がいると好きに戦えないから出て行ってもらうしかないんだが…。

人が確実にいないのは3階層の中部くらいからだ。

ここで遭難したらまず死んでる。

また、いらない噂が流れるんじゃないかと思うと鬱陶しいがほっておくのも気分が悪い。

しばらく、潜り続けていたらダークエルフの救助隊というあだ名に変わっていた…。

今日は2階層11階でPTを見つけた。

「ダークエルフがきてくれたぞ！」

「よかった帰れる！」

「いやいやいや、俺の目的はそうじゃないから。」

「もう戻りますよ、ちゃんと後ろにいてください」

「あの魔物たち固まってるんだけど？」

「拘束の魔法です」

「詠唱してないじゃない」

「詠唱するのが面倒くさいんですよ」

「もう魔法ということにしている。」

「拘束してないやつはパライズをかけて殺す。」

「シャーマンにあつたらマジックドレインでMPを補給する。」

「たんとんと戦闘をしながら救助する。」

「地上に出た、お礼を言われて帰っていった。」

「また、ここからかよ。」

「今日は2回救助した。」

というか、俺が来てくれることが前提になってる。

来ない日があつたらどうするんだよ。

気になって毎日潜るようになった。

修理に出しても潜れるように魔法付与防具も2着買った。魔剣の方が欲しいんだよ…。

1ヶ月ほどしたところ、ギルドからの報奨金も出たのでつい防具を買ってしまったのだ。

感謝状とかもあったが断わった。ここを出ていく時に荷物になるようなものは持ちたくないからだ。

まあ、自分をクエストに出したら救助できなくなるのでギルドもなにも言ってこないだろ。

ギルドの職員にならないかと言われたが断わった。

戦闘以外はしたくないからだ。

第5話 不意打ち

さらに2ヶ月くらいたったときに、俺は魔剣を買った。

カスタマイズの魔剣だ。俺用に打ってもらった。

炎属性の双剣と普通の双剣を持ち歩くのでかさばるのが面倒になったんだが、しょうがない。

巨雷狼との戦いに慣れておかないと4階層で苦労することになる。

火竜には普通の双剣の方が効くから2種類もってるんだが、どうせなら雷属性の双剣も買おうかと思ってる。氷じゃないのは、雷の方が汎用性が高いからだ。

4階層にいったら双剣を3種類も持っていけない。できれば麻痺効果の高い双剣が欲しい。

買えるのはさらに2ヶ月後くらいだろうか。麻痺付きだともっとかかるかもしれん。

結局、2ヶ月半くらいで手に入った。麻痺付きの雷属性の双剣だ。

パラライズをかける頻度が少し落ちたのがうれしい。マジックドレインするのも手間がかかる。

そして、たまには面倒なときがある。今日みたいなことが起こる。

「もうすぐ出口だぞ」

「ありがとうございます」

探知で後ろから近づいてくる冒険者がいた。

最初から怪しいと思っていたが、後ろから襲いかかってきた。

「死ね、ダークエルフ！」

振り向いて双剣で斬りつける、手加減したが死ぬかな？

血を流しながら倒れた。

ギルドに付きだしたところ、遭難して死んだ冒険者の恨みを買ったらしい。

別に、ついでにやってるだけだから遭難して死ぬやつも必ずいる。

自分に出会うまでに間に合わなければ魔物にやられて死んでしまう。

決まった時間に潜るわけでもない。

それでもこういうことがたまにある…。

俺には探知があるから不意打ちも意味ないんだがなあ。

第6話 緊急招集

ギルドからの緊急招集がかかった。

北の森に轟竜が見つかったようだ。

覇竜よりは弱い竜だが、それでも十分強力だ。

Sランクの俺にも招集がかかった。というか宿屋まで来て起こされた。

「君にも轟竜討伐に参加してもらっ」

ギルドマスターのウオズニツクだ。

「得意なのはなんだね？」

「専門は回復職ですけど、上級攻撃魔法も撃てますよ」

「タンカーじゃないので、前衛は無理ですね」

「それでは回復職と魔法職で働いてもらっ」

やはり、というか広場に集まった。60人ほどいる。

前回よりも回復職が多いようだ。死者がでないのを祈る。

前衛は28人で回復職が16人、魔法職が18人だ。

S・Aランクだが、回復職にはBランクもいるようだ。

自分を入れてコキユートスが撃てるのは4人いる。

轟竜が北の城門近くまで来た。

急いで移動をはじめ。

「ダークエルフじゃない、私助けられたことがあるの、あの時はありがとう」

面倒なので頷いた。なるべくスルーしたい。

「あなたは、魔法職なの？」

「なんでもできるがタンカーじゃないから前衛は無理なんだ。コキユートスを撃つたら回復役に回るよ」

「前衛に行ったら最初の一撃で多分死ぬかもしれんな。そういうタイプなんだよ」

「なんでもってすごいわ、だてに救助隊はやってないわね」

「ついでに救助しているだけでそれが目的ってわけじゃないんだがなあ」

「迷宮で迷ってもあなたがくるから安心して潜れるって人も最近多いわよ」

「こっちはそれで迷惑してるんだよ、それに、俺が行くまでに魔物にやられたら死ぬ、助かる保証なんてないよ」

「それじゃ、そろそろ始まるぞ」

詠唱を開始する。魔物はすぐ眼の前だ。前衛に近づきすぎると魔法攻撃があたってしまう。

コキュートスが4発撃ち込まれた。

次に、パライズをかけて、前衛の後ろに回り込む。

前衛を全員探知したので全体回復を発動した。

中級魔法が撃ち込まれていく。魔法攻撃がおさまるまで前衛は待機だ。

何発目かのパライズが効いたのか轟竜は麻痺状態になった。

剣士たちがようやく攻撃をはじめめる。

覇竜のときのようなことがないように、パライズをかけ直す。

これはギルドマスターにも言っている。

麻痺状態から回復されると死者がでかねない。

パライズが飛び交う。

剣士たちはひたすら切り続ける。

そろそろか、俺はグラビティを発動した。

死ぬ時に暴れて巻き添えがでるのはヤバイ。

轟竜が悲鳴をあげる。

倒れる頃だろうか。

轟竜が地響きをあげて倒れた。

回復職の出番はなかった。そして、死者がなかった。

ギルドに戻ると報奨金が渡された。

俺は日が暮れると、今日も迷宮に潜った。

まだ4階層には行ってない。巨雷狼との戦闘にも慣れてきたが、轟竜、覇竜が問題だ。あんなのがいるところに行ったら死ぬ。コキユートス4発くらってもまだ生きてるのはかなりヤバイ。

第7話 4階層

今日も日が暮れた。さっそく潜る。

今日の俺はいつもと違う。4階層目にいよいよ突入だ。

作戦を考えてみた。3階層12階から出口が広くなっていた。

4階層1階にはどうやら巨雷狼が複数いると思われる。

それなら、3階層12階の火竜を2匹、4階層1階に連れていけばいい。

自分の負担は軽くなるはずだ。

火竜亜種がでて意識が奪えない場合には、すぐ逃げることにする。

4階層1階に降りてみた。やはり、巨雷狼が複数いる。4匹だ。

火竜2匹をタンカーとして突入する。

上位攻撃魔法はまだ温存しておく。

MPは、魔法の使用頻度をあげたせいか、かなり成長したが、まだ2発は撃てない…。

ヘイストをかけて巨雷狼を切り裂いていく。使用するのは炎の双剣だ。

1匹あたり10分のペースで倒せている、前衛の2匹もすでに1匹倒した。

あと2匹だ。

残り10分で戦いは終了した。さすが、魔剣、威力が違う。

火竜も含めて全体回復をした。

4階層2階におりていく。

寒い…。

氷の迷宮だった。

なにかいるかな、思ったら一角ウサギだった。うざい、これはうざい。

火竜には小さすぎて戦闘させられない。

どんどん出てくる。なんという嫌がらせ。

この階のボスをそうして見つけた。

氷竜だ。2匹いる。

火竜2匹対氷竜2匹のガチバトルが始まった。

試しに1匹意識を奪ってみる。奪えた。

3対1に変わったところで氷竜は死んだ。

残った1匹も始末する。火竜によって氷竜は全滅した。

寒いが、ここで全体回復した。

早く次の階にいきたい…。

回復が終わったので、4階層3階におりていく。

ここは、地面が土だった。

地面から、角が突き出てきた。

でかい一角もぐらだ。探知できない、うざい、うざすぎる…。

もぐらの相手をしていると、なんか石が埋まっているのを発見した。

近づくと動き出した。

石鎧竜とでもいうのだろうか。3匹いた。

こちらの戦力は火竜2匹だ。石鎧竜の1匹の意識を奪えた。

3対2になった。石鎧竜の攻撃は突進だ。固い体をぶつけて攻撃する。

どうやら火には強いようだ。火竜の火炎攻撃をものともしない。

3対2なのに圧されている。どうやら火竜より石鎧竜の方が強さが

上だ。

火竜が1匹倒れたので、石鎧竜をもう1匹意識を奪った。

これでこちらの戦力は、石鎧竜2匹と火竜1匹だ。相手は石鎧竜1匹だ。

これでこちらの勝ちが決まった。程無く、石鎧竜は死んだ。

石鎧竜を残して火竜には死んでもらった。今までありがとう火竜！君のことは忘れない（嘘）。

石鎧竜2匹のHPを全体回復する。

さあ、次にいくぞ！

4階層4階におりていく。

雷、氷、土ときたら、次は、水だった。

迷宮の中心は石畳だが、左右が湖のようになっていた。

石鎧竜が落ちたら恐らく重くて溺死するだろう。

湖を覗くとなんかいる…。泳いでるよ、なんかでかいのが…。

石鎧竜には湖に落ちないように中心を進んでもらう。

湖の真ん中にたどり着いた時にそれが始まった。

水竜がでてきて、左右から水のレーザーを乱舞してきた。2匹だ。湖から上半身だけだしての攻撃だ。卑怯だ。

俺は石鎧竜を盾にした。どうやら石鎧竜には水のレーザーが効かないようだ。

盾にしながら出口に向かう。水竜はこのままスルーだ。水中戦なんてできねーよ。

4階層5階に降りていく。

天井になんかいる…。

落ちてきた。毒を吐いてるようだ。毒巨大トカゲとでもいうのだろうか、2匹だ。

石鎧竜2匹とも毒を浴びて、毒状態異常になった。

俺には、解毒の魔法がない。

ここは撤退だ。

水竜のところに戻る。

4階層4階だ。ここで石鎧竜が力尽きた。猛毒だったらしい。

代わりに水竜2匹の意識を奪った。

水竜を連れてまた5階に降りる。ふふふ、秘策が俺にはある。

5階におりるや水竜2匹からの水のレーザー乱舞だ。

毒大トカゲを近づけさせない。遠隔射撃をくらえ！

やはり水のレーザーに弱かったようだ。力尽きる毒大トカゲ2匹。

強いぞ、水竜！

4階層6階に降りていった。

ここには1匹いた。火竜の強化版か火竜改とも呼ぼう。

普通の火竜より2倍はでかい、色もなんか赤く輝いてる。燃えているのか？

水竜2匹による水のレーザー乱舞を発射だ。いけ！水竜。

火竜改は飛ぼうとしているが、水のレーザーで動けないようだ。

激しい蒸気があがり続ける。試しに意識を奪ってみた。成功した！

竜族はスペルロードよりも知力が低いようだ。

さすがにこのでかさでは次の階には下りれない。火竜改には死んでもらうことにした。

4階層7階まで降りてみた。

前衛は水竜2匹だ。どうやら電気大トカゲのようだ。2匹だ。

水のレーザー乱舞による遠隔射撃で死んでもらった。

4階層8階だ。さて、次はなんだ？ってこれは…。轟竜だ！

ちよ、無理なのがいた。意識を奪おうとした。失敗した…。

水竜の遠隔射撃で時間を稼ぐ。

パラライズをかける、1回目は失敗。2回目も失敗、3回目で麻痺状態になった。

水竜にがんばってもらうしかない。

パラライズと遠隔射撃の連続だ。

時間がたった。俺のMPが先に尽きた…。

コキートス4発を耐える轟竜だ。そうそう倒せるわけがない。

水竜を連れて撤退する。

3階層12階まで戻った。水竜は4階層1階で死んでもらった。ありがとう水竜、君のことは忘れない（嘘）。

4階層は1階まで魔物は復活していなかった。まあ、往復でいたらどんなPTでも死ぬしな。

轟竜の意識が奪えないとすると、その上位の覇竜も無理だろうな…。

第8話 龍殺しのダークエルフ

俺は考えた。

水竜と電気大トカゲのコンボか？

恐らく電気大トカゲは俺の双剣と同じ麻痺付き雷属性だろう。

今回はそれで轟竜と戦ってみよう。

地上に戻った。

朝日が登っていた。とりあえず、魔石をギルドで換金した。

「ソロで4階層7階まで行っただんですか？」

「8階は轟竜がいたので引き返してきた」

よく考えれば、ソロで轟竜を倒したらギルドで騒ぎになるだろう。というか、どうやってそこまで行っただのか聞かれても困る。

「Sランクでもソロで4階層を攻略するなんて聞いたことがありませんよ？」

「俺は、前衛でもいけるし上級魔法職で回復職でもあるからなんでもありなんだよ」

「もう少し詳しく教えて下さい」

「それは企業秘密だ、苦勞して工夫した方法を人に真似されても困る」

「誰にもいいませんから」

「信用できない、俺は帰ってもう寝る。さすがに疲れた」

なんとか、振り切って宿に帰って寝た。

夕方、起きて飯を食べていたら宿屋の女将、人間のシルティさんに言われた。

「昨日、一人で轟竜と戦ったんだって？もう噂になってるわよ」

やはり、ただ漏れじゃないか、ギルドは信用できねー。

その日、俺は4階層8階で轟竜を倒した。

水竜2匹＋電気大トカゲが正解だったようだ。

4階層9階には火竜改2匹がいたが、水竜と電気大トカゲでなんとか倒した。覇竜までこのコンビでいくしかない。

4階層10階には巨大な猿が2匹いた。ものすごい速度で移動する。スピードファイターだ。

水のレーザー乱舞の前で動きを止めて電気大トカゲで麻痺させる。そのまま殺した。

4階層11階には大きな轟竜がいた。もうめちゃくちゃでかい。

だが、所詮は轟竜だ。水竜と電気大トカゲで殺した。

4階層12階にはラスボス覇竜がいた。

でも水竜と電気大トカゲの敵ではない。殺した。

地上に戻ると昼過ぎになっていた。

轟竜と覇竜のHPが高すぎるのだ。削るのに時間がかかった。

ギルドに入って魔石を換金した。

「…、覇竜を倒したんですか？」

「まあ、そうなるな」

「迷宮をクリアするとランクが変わるのか？」

「最上級のSSランクになります」

「さっさと更新してくれ、もう疲れた」

「SSランクはあなたが初めてですよ？」

「どうでもいいよ、更新してくれなければそれでもいい、帰る」

「わかりました、更新しますから」

「これではあなたは史上最強の冒険者になりました」

ギルドカードを受け取ってさっさとギルドをでた。

宿に帰って寝た。

夕方起きた、もう4階層には興味がなくなった。3階層まで行く。

飯を食っていると、宿の女将のシルティさんが話しかけてきた。

「SSランクになったんだって！もう街中の噂だよ」

…、ギルドめ、いいかげんにしろよな…。

「ギルドの人が来て、あなたに相談があるそうだよ」

知るか、絶対行かない。

俺は、迷宮に入ってしまった。

3階層12階まで行って戻ってきた。3PTを救助した。

なんか最近増えてないか？

俺を頼って無茶すると死亡者がでるぞ。

地上に出たら朝になっていた。ギルドに入ってしまった。

ギルドマスターのウォズニックがいた。

「なんで昨日ここにこなかったんだ？」

「救助を優先しただけですよ」

「最近、救助するPTが多いんじゃないですか？注意してくださいよ」

「それは、そのうち話そうとは思ってたんだよ」

「どうしようというんですか？見捨てるとかできないですよ？」

「それなんだよ、やめてもらうわけにもいかないから困ってるんだよ」

「無茶して全滅するPTもでてるんじゃないですか？」

「たしかに、そういうことが起きている」

「それと、きみに会いたいって国の方からも話がきてるんだよ」

「俺が伽盧皇国を出てきた理由を知ってますよね？」

「もちろん知ってるよ。だから、困ってるんだよ」

「会う気はないのかね？」

「まったくくないですね」

「分かった、そっちはなんとかする」

「それと一人で覇竜を討伐しろっていうのも無理ですよ、まともにやったら即死しますから」

「でもきみは倒したんだろ？」

「まともに相手しなきゃいいんですよ、竜は馬鹿ですから」

「その方法は教えてもらえないのかね？」

「誰にも真似ができない方法です、言えというならここもでていきます」

「分かったよ、はあ」

頭を抱えて困ってるようだ。だが、知らん。

ギルドをでると人だかりができていた。

無視して出ようとする。

「待ってくれよ、龍殺しのダークエルフ」

どうやら新しい呼び名ができていたらしい。

「もう、眠いんですよ、帰って寝るつもりなんですが」

「わかったよ、でも本当にソロで覇竜を殺したのか？」

「それはギルドマスターにも秘密にしています」

そういつて押し切って、宿に帰ってきた。疲れた。寝る。

第9話 狂戦士

俺は、あることに気づいた。

マジックドレインを覚えてから、MPが増えているような気がするのだ。

ただし、増加量は微妙だ。でも、マジックドレインをさらに頻繁に使うようになった。

塵も積もれば山となるだ。

それと覇竜を倒したレベルアップでとうとう上級魔法を2発撃てるようになった。

レベルは82まであがった。

その魔力で最上級魔法を作り出せるんじゃないかということも考えた。

魔法の詠唱は英語だ。ここでは魔法語と呼ばれている。法則が分かれば作れるんじゃないか？

詠唱とイメージが重要のようだ。

韻を踏んでいるのは、確かだ。それなので、歌に似ている。

手持ちで一番多い火系で最大の魔法を作る方法を考えている。

名前はデストロイとでもいうのだろうか。

歌を作っては、唱えてみた。場所はもちろん、迷宮だ。

イメージは炎による破壊だ。爆発ではなく破壊なのだ。実現すれば、攻撃力は大幅にあがるだろう。

最初は、いまいちだったけど、最近、発動の反応を見せている。もう少しで発動する感じがする。もっと、流れるような歌いやすい感じにした方がいいのかな。微妙に変えたパターンを考えている。

実験場所は、4階層の1階だ。ここは、魔物を倒せば広くて静かだ。いい。

最近では、ここですらいろいろ考え込んでいる。

Sランク専用の迷宮にくるものはめったにいない。真夜中だしな。

上から降りると、魔物が復活しやすいのでひまつぶしにもなる。巨雷狼は歯ごたえのある敵だ。下からあがると復活しないのはある意味良心的なのかも知れない。

そんなことをやって1ヶ月半になる。魔法は発動した。一撃で迷宮の風景が変わった。さすが破壊の魔法。

試しに巨雷狼にデストロイをかけてみた。レジスト耐性の鬼、巨雷狼が4匹破壊された。全滅だ。攻撃範囲がやばい。狭いところで撃つたら自滅するだろう。その点、この迷宮は広域型なので都合がよかった。伽盧皇国の迷宮だと使えないな。

次は、氷の最上級魔法を作ろう。名前は、ファンデルワールスゼロだ。分子結合を解体する氷の魔法。これができれば、凶悪な魔法になるだろう。凍らせるのではなく、物質を解体してしまうのだ。

全てが氷の塵へと変わるイメージだ。

そんな日常を変える噂が立った。

西の大国、ウルズ連邦とこのアルノール共和国との間で戦争が起きるのではないかという事だ。

普通なら、興味はまったくないが、このデストロイを使える相手が見つかった。使いたい…。

ギルドを訪れると、やはり、戦争参加の募集があった。

窓口の女の子に声をかけた。

「戦争に参加したい」

「…、龍殺しのダークエルフが戦いたい？」

なんか怯えている。今はどんな噂がたつてんだよ。

「城の衛兵にこれをもって行って下さい、あなたなら参加できるでしょう…」

城に行つて衛兵を見つけた。入り口にいる。まあ、そうだな。

「ギルドからきました。これをお願いします」

ギルドでもらつた紙をみせた。

「…、龍殺しのダークエルフだ…」

なんか怯えている。やはりたちの悪い噂がたっているようだ。

そつえば、最近救助するPTも減つたような気がする。なにか俺

を見て怯えるようになったので変だとは思っていた。

ギルドマスターがなにかいらんことをしたのか。俺を怯えさせるようななにかを風潮したに違いない。

「西にあるウエストフォートレスが最前線だ。そこに行ってもらって希望者をまとめて移送しているから、明日の朝、ここに来てくれ」

なんかあまり関わりになりたくないようだ。冷たい…。

翌日、来たら冒険者が集まっているようだ。みんな自分を避けている。完全にぼっちだ…。

馬車に乗り込んでガタガタを揺られている。

護衛はいないようだ。そりゃそうだな、冒険者の移送だし。

俺に話しかけてくる冒険者はいない…。まあ、この方が気楽でいい。

夜になると2人1組で見張り番をするが、俺の場合は1人だ。まあ、探知があるから楽な仕事だ。

ちなみに飯も1人だ。誰も近寄らない。

そうして、ウエストフォートレスに着いた。

「あなたが龍殺しのダークエルフか…、SSランクの…」

なんかお偉い人が出てきて怯えている。もうどうでもいい。

「前衛職で、それなるべく最前線がいい」

希望を言った。魔法以外にもやりたいことが実はあるのだ。

「わかりました。そのように配置します」

やはり冷たい。そっけなさすぎる。とつとと消えていった。

すでに小競り合いは始まっているようだ。

明後日に本格的に本隊が動き始めると言われた。

俺は最前線の部隊に組み込まれた。戦闘訓練をみんなしているが、自分はぼっちだ…。

座り込んで眺めていても誰も言わない。まあ、そうなるわな。

2日がたった。いよいよだ。

相手も動いたようだ。ウェストフォートレスの西からだと敵の軍隊が見えた。

さすが最前線、敵がよく見える。

俺の部隊に命令がくだった。俺は詠唱を始める。

いきなり、敵のど真ん中にデストロイをぶちかました。

文字通り、人がゴミのように吹き飛んでいく。

俺は走りながら加護を受けて初めて、自分に全体強化をかけた！これが出たかった！

狂戦士になる。全てが止まって見えた。一気に相手との距離を詰める。

体が弾丸のように進む。剣も矢も魔法もすべてがスローモーションだ。

炎の双剣を敵に突き刺していく。まるで戦闘ではなくダンスを踊るかの気分だ。

ひたすら、前進する。新しい敵を見つけるためだ。

いつの間にか、俺は笑っていた。気分がいい。どんどん死ぬ！！！！

敵が逃げるようになった。だが、俺はまだ戦いたい。弾丸と化して敵を殺し走り続ける。

魔術師を探知した。魔法が来る。全体魔法だ。レジストする。魔力と魔力がぶつかる！気分がいい！もっと撃て！

魔術師も一緒に踊ろうぜ！！！！ひたすら殺し続ける。

まとまった敵を見つけた。豪華な鎧を着ている奴がいる。

これはいい。みんな一緒に踊ろうぜ！！！！

気づくと敵は誰もいなくなった…。

誰もいない！！！！殺し足りない！！！！もっと踊りたい！！！！

あまりの激しい衝動で、逆に我に返った。

ここには誰もいなくなっていた…。

戦場から離れて敵陣地深くまできていたようだ。ウェストフォートレスまでかなりの距離がある。とぼとぼと戻った。

「龍殺しのダークエルフが戻ってきた…」

みんなドン引きしている。

「覇竜殺しは本当だったんだ…」

いや、本当だし。もう、みんな目も合わせてくれない…。

適当に座りこんで、ぼーうつとしていた。

どうやらそろそろみんな帰る準備をしている。俺も帰るとするか…。

また馬車で帰る。そういえば金を貰ってなかった。まあ、ずいぶんと楽しめたのでいいか。

馬車の中では自分の周りに誰もいない。隅の方に集まっているようだ。

まるで化物をみるような目をしている。夜番も俺はしなくていいらしい。まあ気にしない。

ノワールの街についた。ギルドに入ると報奨金を貰えた。

募集の時の金額より多い。30倍はある。

ギルドマスターのウオズニックがいた。

「報奨金だが、それでも足りないか？」

「いえ、やけに多いですけどなんですか？」

「お前がほとんど殺したんだよ、敵を。敵の大将も魔術師たちもみんなだ」

「そういえば、周りに味方がいないような気がしましたね」

「いきなり敵本隊を魔法で吹き飛ばしたそうだが、なんの魔法か問い合わせもきている」

「火系最上級魔法デストロイですよ」

「どこで覚えたんだ？」

「4階層で籠って作っただですよ、あそこは静かで落ち着きますから」

「全く規格外だな、攻撃も速すぎて見えなかったといってたぞ」

「前衛もこなしますから本気を出せばあれくらいですよ」

「魔法攻撃は受けなかったのか？」

「みんなレジストしましたから」

「もっと報奨金をださせることもできるぞ、これでいいのか心配していたくらいだ」

「久しぶりに楽しめたのでこれでいいですよ」

「どうやら覇竜を倒したのは本当みたいだな、目撃した冒険者がそういつた」

「他に用事がなければもう帰っていいですか？」

「…、もう行っている」

ギルドを出て、宿に帰って、昼に寝た。今日も夕方から迷宮にいかなくては。

第10話 再会

夕方起きた。飯を食っていると宿の女将のシルティさんが言った。

「あんた一人で軍隊を殲滅したんだって？化け物のような強さだったって噂になってるわよ」

化け物つてもはや人ではなくなってるなあ。まあ、どうでもいい。新しい魔法作りの方が楽しい。

「また戦争は起きないんですか？」

「ウルズ連邦は降伏して、賠償金をだすことになるそうだよ」

どうやら、当分戦争は起きないらしい。楽しかったのにつまらないな。

4階層1階にあいかわらず来た。

ここ最近、氷の最上級魔法を作っているがまったくうまくいかない。ファンデルワールスゼロだ、分子結合を解体する氷の魔法は、難しいようだ。

その代わりに、ブリザードストームができた。

氷結状態にする全体魔法だ。威力はコキュートスの方が上だろう。微妙だ。

サンダーストーム、ブリザードストームの応用でプラストストーム

もできた。

やはり、最上級魔法は雷系の方が簡単なのだろうか。

手持ちはパラライズ、サンダーウェブ、サンダーストームと3つからなんとか編み出せないか？

でも、グラビティから攻撃魔法を作るのも捨てがたい。

重力系攻撃魔法グラビトン。これを作ってみることにする。

2ヶ月でできた。グラビティがかなり参考になった。重力制御の方法がこれで分かっていたからだ。

さつそく、石鎧竜を相手に撃ってみた。胴体に丸い穴が空いた。ただ、迷宮の壁にもかなり深い穴が空いてしまった。

撃ちまくるのは落盤的な意味で危険かもしれない。

次に、雷系最上級魔法テスラだが、なかなかうまくいかない。サンダーストームが完成されすぎてるからだ。応用するにも難しい。時間をかけて煮詰めていく必要がある…。

地上に戻ると、やつらがいた。

狼と虎とエルフだ。竜人はきていなかった。

俺が酒場に行かないから迷宮の出口に交代しながら張り付いていたようだ。

「見つけたわよ、真夜中のダークエルフさん」

酒場に連れていかれた。いきなり、酒場の冒険者達がいきなりどよめいた。逃げ出す奴までいる。

「懐かしい呼び名だな」

「ここでは龍殺しのダークエルフって呼ばれているようね」

「その呼び名になってるみたいだな」

「本題に入るけど、皇都に戻ってくれない？」

「断る、ここの迷宮が気に入ってるんだ」

「迷宮なんてどこも一緒でしょ？」

「皇都の迷宮は狭苦しい」

「皇都の王様からあなたを呼び戻すよう直々に頼まれたのよ」

「その王様とやらが嫌いでここにきたんだよ」

「皇都の王宮ではあなたが復讐にくるんじゃないかとも思われてるのよ、戻れば報酬がたんまりでるわよ」

「金には困ってない、復讐なんて面倒くさいことをする気もない。それとも伽盧皇国はこの国と戦争でも起こす気なのか？」

「あなたがいるのに戦争する気になるはずないじゃない！、一人で軍隊をやったんでしょ？」

「あれは楽しかったな。また戦争が起こったら参加する気だ、戦争でもない和本気を出せないからな」

「覇竜がいるじゃない」

「あれは楽しめないんだよ、殺されるかもしれないからな」

「俺からも頼むから戻ってくれないか？」

珍しく虎が話しだした。

「皇国の軍隊に兄弟がいるんだよ」

知らんがな。

「とにかく、俺は戻る気はない。戻ってほしかったらこと同じ迷宮を用意しろ」

「無茶苦茶言っわね、またパーティを組む気はないの？」

「俺が籠ってるのはSランク専用の4階層だぞ」

「危険なことばかりしてると死ぬわよ」

「俺にとっては4階層は安らげる場所なんだよ」

「どんだけ強いのよ」

「巷では俺は化け物とも言われているそうだな」

「わかったわよ、諦めたわ。本当に復讐には来る気はないのね？」

「まったくないね」

「それじゃ、私たちはこれで皇都に戻るわ」

「ああ、達者でな」

3人が去っていくとまた声をかけられた。

「面白い話を聞かせてもらいました」

誰だ、コイツは？

「私はウルズ連邦からきたコーディと言います」

「話を聞いていたのなら分かるだろ、断る」

「うちの迷宮はここより広いですよ」

「話には聞いているがアリの巣みたいなんだろ？こっちのほうが好みだ、そっちの迷宮は面倒くさいんだよ」

「お金ではなく、領土をお渡しすることもできます。貴族になれますよ」

「強くなることが目的なんだよ、戦う以外は興味ない」

「十分お強いではないですか？」

「まだこれじゃ、全然足りないんだよ」

「あなたは一国の軍隊よりも強いんですよ？」

「俺の基準は、魔物であつて人じゃない」

「既に、覇竜よりも強いじゃないですか」

「覇竜よりも強い魔物を用意できるのか？」

「いたら、グラビトンを撃ちまくってやる。」

「残念ながらうちの迷宮も最強なのは覇竜ですね」

「だったら用はないな、帰ってくれ」

この後も、話が平行線になったが、結局、帰っていった。
遅くなってしまった。宿に帰って寝る。

第11話 魔導院

夕方起きると、ギルドに行った。

昨日は、魔石を換金しなかったからだ。

ギルドマスターのウォズニツクがいた。

「話は聞いたよ、ウルズ連邦と伽盧皇国から誘いがきたようだな」

「両方断わったよ。金も地位もいらないうてね」

「もう少し詳しく話してくれないか？」

エルフたちのとコーディの話を説明した。

「これは、上に説明しておく。それと、魔導院からおまえに来て欲しいって話があるが断ろうか？」

魔法には興味があった。

「魔導院ってどういうところなんですか？」

「主に魔術師を教育する機関だ」

「魔法の研究とかはしないんですか？」

「そこまでは分らんよ。興味はあるようだな」

「見てくるだけならいいですよ」

「それなら、魔導院に話を付けておく」

魔法の研究材料が落ちてないだろうか。テスラを完成させる方法とか…。

ファンデルワールスゼロは無理だろう。あれは諦めた。

結局、明日魔導院に行くことになった。

ここが魔導院かぁ。

結構、大きいところだな、前の世界の大学くらいある広さだ。

俺には縁がないものと思っていたが、来る機会ができるたことは、ちょっとうれしい。

門番に名前を告げると、おっさんがでてきた。

院長のシロツコっていうエルフだ。

「国の方へあなたに来て欲しいという話をしたんですが、本当に来てもらえるとは思いませんでした。どうぞ魔導院の案内をしますよ」

「ギルドマスターから言われてきたんだが、国からはきてないな」

「あなたがお偉い方達を嫌っているということで、国とあなたの窓口がギルドマスターになってるようですよ」

そつなるんだろうな、話がきても全部断わっただろうし。

一通り、案内してもらった。教室、食堂、教授室、講堂、実験棟、資料館…、本当に大学みたいところだな。

そして、学院長室へと入っていった。意外と普通の部屋だった。

「魔法の研究は行なってないんですか？」

「教授が個人的にやっておりますて、公にはされてないですよ」

「ここに、俺はなんのようて呼び出されたんてしょうか？」

「あなたの話をして聞くためですよ」

「あまり話せることはないと思いますが」

「あなたはデストロイという魔法を使ったそうですね」

「あれは火系最上級魔法ですが、普通の魔術師には発動できないと思いますよ」

「なぜですか？」

「上級魔法よりも燃費が悪いんですよ。MPをバカ食いますよ。おそらくですが、知力も相当ないと発動しないと思います。迷宮で知力もMPも相当あげましたからね、迷宮で戦闘すると地上よりも成長が速いというのは聞いてますよね」

「迷宮の特徴の一つですね、ただ普通の魔術師ですとレベル60を超える人はなかなかいないですね」

「普通の魔術師では、スペルオーガやスペルロードを倒せないということですか？」

「よく分かっていますね、あれらは上級魔法を使うので死亡する魔術師が多いですよ、死ににくいようなものですね」

「プレートメイルでも着込んでいけばいいじゃないですか」

「金属の鎧は魔術を阻害するんですよ、あなたも革製防具じゃないですか」

ラノベの常識と同じようだ。

「あなたはどこの魔導院で習われたのですか？それとも誰かの弟子になったのですか？」

「ダークエルフの里で習いました」

嘘を言ってみた。スペルオーガやスペルロードから習いましたとは言えないな。

「魔導院よりもあなたの里の方が魔術が進んでいるようですね」

「エルフの里は違うんですか？」

「エルフ達は精霊魔法を好みますから、あなたは使えないそうですね」

習う相手がいないんだよとは言えないな。というか精霊ってどうい

うものなんだ？だが、聞いたらやぶ蛇になりそうだ。

「そっち方面の才能はないんですよ」

「ここで魔術を教えたりはできませんかね？」

「人にものを教えるのは苦手なんですよ」

「そうですか…、ここにあなたの研究室を用意することもできますよ？」

「自分は4階層で研究してるんですよ、あそこは実験する魔物もいて都合がいいんです、ただ資料室には興味があります」

「禁書以外ならお見せ出来ます」

「禁書というとデスとかですか？」

デスは即死魔法だが、成功率が低くて実戦では使えない魔法だ、あれを食らう冒険者もいるのか？

「…よく知ってますね、それは禁じられた魔法です、使わないことをお勧めします」

とりあえず、資料室を借りることはできた。いつでも使っていていいということだ。これはうれしい。

さっそく、資料室に行って見た。ただ、ドイツ語で書いてある…。しゃべるのには慣れたが、専門書として読むのは面倒そうだ。国語辞典みたいなものを探そう。

窓から眺めている人ばかりがあった。ここの生徒だろうか。

「あれが龍殺しのダークエルフか、すげー、はじめてみた」

「剣術もすごいんだぞ、軍隊を一人でまるごと全滅させたって聞いたぞ」

「先生に聞いたら、4階層で魔術を研究してるんだって」

「4階層って地獄みたいなところでしょ？」

「ダークエルフこえー。」

なんか盛り上がっているようだ。まあ、無視しておくか。そのうち飽きるだろう。

そして、俺は4階層にいる。

結構な知識が増えた。雷系上級魔法テスラの完成も近いかもしれない。

イメージはサンダーストームを広域化させた感じだ。威力をあげるイメージがでなかなか固まらない…。

いつそ、デスを広域化した大量虐殺魔法の方がいいかもしれないと思う今日この頃だが、使ったらヤバいことになりそうだ。単一なら成功率は低いが大量にばらまけばそれでも死者がでるだろう。

テスラが完成しないので、先に即死系上級魔法メガデスが成功した。ついで、やってしまった。後悔はしてない。

成功率もデスより高いので微妙に使えるかもしれない。50%の確率のようだ。微妙な魔法だった。

最近気づいたのだが、魔術院にときたまいくようになって後を付いてくる奴がいるようになった。学生ではないようだ。

意識を奪って理由を意識から読み取った。理由が分かった。国からの監視がついたようだ。

意識を奪えることがバレるとまずいので始末した。

資料室にいとと学院長に呼ばれた。

「あなたはデスを使いましたね」

「言われたとおり使ってませんよ」

「あなたに付いていた人の死体が発見されました、死因は突然死です」

「使ったのは即死系最上級攻撃魔法ギガデスですよ、デスは使ってません」

これは、メガデスをデスにフィードバックし、80%まで成功率をあげた単一殺人魔法だ。ただ、MPをド力食いする。

上級と最上級の間といったところか、なので最上級にした。つい、作ってしまった、後悔はしていない。

「なんで監視なんかするんですか？」

「理由は言えません。それにギガデスも使ってはいけません」

どうやら国から要注意人物と思われたようだ、これは。
ただ、自分を追い出したりはしないだろう。デメリットばかりでメリットがなにもない。

それから監視が付かなくなった。

魔導院にいと、相変わらず自分に興味を持っているようだ。
たまには遊んでやろうかと声をかけてみた。

「なにか聞きたいことでもあるのかい？」

「すごい魔術師なので話してみたかっただけです…」

ブルブル震えている。怖がつてるんじゃない。

「じゃあ、自分に魔法をなんでも撃ってみていいよ」

広場のようなところに行った。何が起きるのかと人が集まってきた。
いる。

「じゃあ、いきますよ」

魔法が撃ち込まれたが全部レジストする。じきに諦めたようだ。

「それじゃあ、こちらからも撃つよ」

「えっ！」

学生が青い顔をして凍りついた。

マインドゼロを撃った。

「魔法を撃ってみて、なんでもいいよ」

「魔法が撃てない…、なんで…」

「魔術師を無効化する呪文だよ、そのうち戻るよ」

遊んでみたが、いまいちだった。やはり、魔物と戦う方が楽しい。

そのまま、資料室に入ってしまった。

やはり、強力な魔法は魔法語で書かれているんじゃないだろうか？
英語の本を探そうとやってきた。

第12話 ノワールの統治者

目的の本は見つかったが、埃をかぶってる。

この世界で魔法語を理解できる人はほとんどいないようだ。

面倒なので、王様みたいなところに乗り込もうと思うが、あまり荒立てたくない。

強力な全体拘束魔法を作ろう。

イメージは掴んでいる後はその方法だ。

グラビティとグラビトンがあるのでその重力系全体魔法グラビティワールド（重力全体拘束）だ。

この国の中枢は、ノワールから南下したラングという街らしい。

グラビティの応用技を使う。重力制御で推進するイメージだ。

グラビティフォース（重力制御魔法）。

グラビティフォースで一気に街道を南下する。使用するMPもそこなので連続使用する。

3日かかってラングの街に着いた。この国の中枢だけあってでかい街だ。

この国は共和国ということで貴族院と平院の2つから代表を選出される。任期は連続できる。

事実上は、10年連続して治めているジオクライオンという貴族が王様みたいなものらしい。

その場所に乗る込む。

総統府というところにいるのは、分かっている。

城門からは入らず、グラビティフォースで城壁をくぐった。

総統府の衛兵をパラライズする。痺れているが見た目は立ってるからすぐにはバレないだろう。

どンドン、パラライズする。

中をくぐって行く。さすがに騒ぎ出したようだ。

まとまってきたので、グラビティワールドを発動する。

全員硬直した。

総統の部屋は目の前だ。

誰にも邪魔させない。

部屋のドアをブラストで吹き飛ばす。

目を白黒させているお偉い人がいた。これがジオクライオンか？

「お前がジオクライオンか？」

「龍殺しのダークエルフ！！なんでお前がここにいる！？」

「監視を俺に付けたな？俺は気に入らないものがあつたら龍でも軍隊でも国でも滅ぼす。監視なんて面倒なものをつけてお前は俺をどうしたい？」

「！？」

「俺にノワールの街をよこせ、統治してやる。龍の首に鈴を付けた

いんだろう？ノワールが鈴だ！だが、依頼は受けても命令は受け付
けん。依頼を受けるかどうかは俺が決める！これが俺の妥協点だ、
受けるかどうか今決める！」

言いたいことは全て言った。

「私の一存では、決められない……」

「だったら1日だけ待ってやる。俺の気に入らない答えだったらど
うなるか分かってるだろうな？」

とりあえず、1日、外でブラブラ見物でもしてこよう。

街がどうも慌ただしい。まあ、そうなるわな。

珍しい屋台料理でも齧りながら、武器屋と防具屋を覗いてみる。

その頃、総統院では、貴族たちを集めて議会を緊急招集していた。

「だから、ダークエルフにはなにもするなと言っただ」

「だが、監視をつけることには同意したじゃないか？」

「問題は、ノワールの街をダークエルフに渡すかどうかだ」

「ノワールは事実上この国の中心だ、渡せるわけがない」

「この国は迷宮があるからできたんだぞ、その迷宮を渡せるものか」

貴族は全員反対した。

「渡さなければこの国は破滅する、そうダークエルフは言ったんだ。ダークエルフが選択させたのは渡すか滅ぶかだ。お前たちはダークエルフと戦う気があるのか？」

ジオクライオンはただそう告げた。

「……」

「ウルズ連邦からの間者とギルドマスターの報告がこれだ。火系最上級攻撃魔法デストロイによる軍隊の壊滅、魔術師たちによる攻撃魔法はすべて無効、剣士と魔術師は皆殺し、将軍も含めて皆殺しだ！我々にはもう選択する余地はまったくないと私は思う」

ジオクライオンは結論づけた。

「渡すことにはもう反対しない」

全員がそう納得した。

「ノワールはダークエルフによる街になる。国の命令も受け付けない完全な自治だ、これでいいな」

第13話 ダークエルフの統治（1）

俺は、ノワールの街の執務室にいる。

迷宮の4階層に作りたいと言ったら反対された…。

まずは、開拓村の建設だ。

迷宮探索隊を作った。これで開拓民を作る。魔導院にも協力を仰いだ。

開拓民を作ったら、村の建設を行う。

場所は、森をデストロイで焼き払った。4つの開拓村ができた。あと2つは様子をみて追加する予定だ。

その周りに砦を築いた。冒険者には魔物討伐のクエストを発行した。

俺は、村の外壁を作らせている。いずれは街の外はすべて村になる予定だ。

迷宮から出る魔石は金になる。それをほとんど建設に回した。そのせいか、6年で外壁は完成した。

外壁内の森は焼き払った。今は田畑がそのかわりになっている。

農耕機具もできるだけ改良した。肥料は公衆トイレを作って回収する。

豊かになれば収入も増える。公衆バスの代わりに、公衆馬車も作っ

た。

特産品も作った。酪農によるバター、チーズ、それと酒だ。

今の問題は、人口増加だ。街の拡張が必要だ。衛星都市を作るとしよう。

一つあたり10年を目標にする。それで基礎を立ち上げる。

ノースノワールの街が立ち上がった。

次は、サウスノワールの街を立ち上げる。

俺は暇を見つけては迷宮に潜った。4階層は落ち着く。

ときおり地上に発生する火竜亜種は、グラビトンを撃ちまくって倒した。

そして、俺がノワールを手に入れてから30年が経過した。

俺ももう70に近いが、ダークエルフはどうやら長寿のようだ。見かけはまだ20代くらいだ。

全く年をとっている感じがしない。剣の腕もあがる一方で衰える様子がない。

ノースノワール、ノワール、サウスノワールと3つの街があり、当分はこれで人口を賄えるだろう。

ノースノワールは商業、サウスノワールは工業の街だ。工業は職人を雇いいれた。順調に街は成長している。

俺は正直、迷宮の戦闘だけでは満足できなくなっていた。
こういう仕事をするのも楽しいものだ。

ノースノワールとノワール、サウスノワールとの間にも公衆馬車を
走らせている。

行き来が盛んなので本数も多い。

何もかも順調だ。

今の總統からはなにも言ってこない。

さすがに、長く居座ったジオクライオンも引退しており、新しい総
統にはダークエルフには関わるなどでもないってあるんだろう。

たまに、火竜亜種討伐の依頼が来る程度だ。

そのくらいなら断ることもなく了承している。

火竜亜種は俺がグラビトンを撃ちまくるだけで死ぬから問題ない。

戦争も起きていない。

北のトルメキア帝国と伽盧皇国との間で小競り合いが続いたが収ま
ったようだ。

決定的なこともないまま長いこと小競り合いを続けていたので両国
とも疲弊したのだろう。

この国は俺がいることもあって平和だ。ウルズ連邦との戦いで領土
の割譲を受けたようだ。がそれにも文句を言っていない。
ウルズ連邦はおとなしくしているようだ。

不満があるとすれば、たまには狂戦士化して戦いたいものだが相手
がいないくらいだ。

それと俺の領地と他の街の間にはあいかわらず魔物が出現するのでいまだに護衛をつけるしかない。

どうにかしたいものだ。

蒸気機関を作りたいのだが俺にはその知識がない。蒸気機関がほしい。

迷宮に関して言えば、ギルドに1階層12階と2階層12階に休憩所を建てさせた。

無茶をするものがないようにランクに見合わなければ通さないようにしている。

これで死亡率も減った。しかし、3階層のスペルオーガやスペルロードで死亡する冒険者は絶え間ない。

こればかりはどうにもならない。

神官に関しても冒険者を増やすように努力はしている。以前よりは増えた。

神殿や治療院の価格を抑えるにはしているがそれでも儲けがおいしいのだろう。

できればもう少し神官の冒険者を増やしたい。

魔導院についても費用を抑えるようにしている。魔術師を多く生み出すためだ。こちらはうまくいっているようだ。

その代わりに援助金を出すことになったが、魔術師の育成も必要だ。俺はもう魔導院には行かなくなった。あそこの資料室で必要なものは読みつくしたからだ。できれば禁書が読みたい。

マジックドレイン、マインドゼロも積極的に教えるようにしている。マインドゼロはやはり禁書に相当していた。

愚かな事だ。あれを使えば、スペルオーガやスペルロードにも対抗できるというのに阿呆か。

食事に関しては、以前の世界の料理をこの世界でもいくつか再現させた。好評のようだ。

この街が食べ物の名所にもなっている。いいことだ。

後は、畜産にも力を入れている。主に乳牛によるバター、チーズの生産だ。保管方法に問題があるので牛乳は諦めている。

乳牛は、肥料も産み出すのでそれは農業に回している。評判は上々だ。俺はチーズ好きなのだ。

酒造の生産も拡大している。ワイン、焼酎、ビール、果物酒が主力だ。俺の好みは焼酎だ。

果物は腐りやすいので酒にするのがいい、味がいろいろと楽しめる。いつの間にかこの街最大の輸出製品になっていた。

みんな酒好きなのか。

今の仕事は、ノースノワール、サウスノワールにも外周に外壁を立てて、農地をさらに確保することだ。

開拓民は入れたが、外壁はすぐにはできない。気長に待つしかないだろう。

この国の農地は南の諸島に集中している。魔力が少なく魔物がほとんどでにくいからだ。

この領地からもっと配給できれば国も潤うことだろう。

私は、テオクラリオン、ジオクラリオンの孫だ。アルノール共和国の総統をしている。

今のところこの国は平和だ。忌々しいが、龍殺しのダークエルフのおかげだ。

一人で覇竜を倒し、一人で一国の軍隊も倒すという化け物だ。あの者がいるおかげでウルズ連邦もおとなしくしている。

ノワールの街を治めていたが、勝手に街を増やしているようだ。今では3つの街を治めている。

祖父からくれぐれも龍殺しのダークエルフには関わるなと言われている。

忌々しいが、言うとおりにしている。あの街には迷宮くらいしかなかったが今では商業、工業の街に変わっている。

農業も盛んで、南部の諸島から苦情がきている。今まで農業は南部の諸島が独占していたからだ。

その上、完全独立を宣言しているのであの領土が豊かになっても国にはあまり関係ない。

ノワール付近の街には影響があるらしく、豊かになっているようだ。

ノワールの街の方法を取り入れようとしている貴族もいる。

この国に強力な魔物が現れるとダークエルフが殺してくれる。関わるのはそれくらいだ。

ただ、ノワール産の酒はうまい。特に果物酒がうまい。チーズとやらもなにやらうまい。肉によく合う。じゃがバターも寒い時期にはうまい。

ダークエルフのやることはよくわからんが、アルノールの食生活が豊かになっている。

忌々しいがあの者の内政能力は高いようだ。貴族の中には宰相に押しているやつが出てきている。

今のところ、ダークエルフには関わりたくないなので退けている。

第13話 ダークエルフの統治(1) (後書き)

正直、この手の話を書くのは苦手です…。

これでも原文から少しづつ省きました。少し省きすぎたかもしれませんが…。

第14話 エルフの訪問

俺が執務室に戻るとエルフがいた。

虎と狼はすでに冒険者を引退したそうだ。死なずに引退できるものは少ない。いいことだ。

竜人はいまだに現役のようだ。

「あなたが領地をもつなんて意外よね」

「覇竜も齒ごたえがなくなって、迷宮も昔と違ってつまらないんだよ、5階層がきんものかな」

「こないだも覇竜が地上にでてきてうちの国じゃ騒ぎになったわよ」

「あんなの魔法を撃ちまくればすぐ死ぬだろ」

「一人で覇竜を殺すなんてあなたくらいのものよ」

「まあ、この国でもノワール以外で出現すると俺が呼ばれるな。伽盧皇国は戦争していたが、やはり疲弊しているのか？」

「正直、景気は悪いわね。税金もあがってみんな苦しい生活をしているわよ、まあ、冒険者には関係ないけどね」

エルフもAランクにあがって金には困ってないようだ。

「あの狭苦しい迷宮でよく戦う気になるな」

「こっちの迷宮の方が難易度が高いのよ」

「一番難易度が高いのはトルメキアのような、一度行ってみたかったが、今の俺には仕事があるので無理だ。それで何のようだよ、伽盧皇国に行く気はないぞ」

「ノワールの街と貿易を促進したいらしいのよ」

「それを言うなら俺じゃなくて総統に言え」

「伽盧皇国はあなたに宰相の地位を用意すると言ってるわ」

「興味はないとは言えないが、ノワールの拡大が今の俺の仕事だ、ここでほっぽり出すことはできんな。いずれは後2つ街を作るつもりだ、伽盧皇国ほどじゃないが小国くらいの力になる」

「それが伽盧皇国には気に入らないのよ。アルノール共和国だけどころん豊かになっているわ」

「戦争なんてする方が悪い。あれはすぐ解決できなければ国が弱るだけだ」

「戦争というものは始めるのは簡単だけど終わらせるのが難しいのよ」

「デストロイを2発くらい撃てば軍隊なんて壊滅するだろ、テスラは今一使い勝手が悪いしな」

「なによその恐ろしい魔法」

「デストロイは火系最上級攻撃魔法だ、テスラは雷系最上級広域攻

撃魔法だ」

結局、ファンデルワールスゼロは完成しなかった。

テスラはMPを恐ろしく食うため、俺でも1発しか撃てない。破壊力と攻撃範囲は最強なのだがな。

それとテスラは空から雷を補給するため、迷宮では撃てない。

「それって使える人は他にいるの？」

「発動できる魔術師がいないな、Sランクの魔術師でも撃てない」

「そういえば、相変わらず革製防具を着込んでるわよね、双剣もぶら下げてるし」

「これが動きやすいんだよ、それに街の兵たちに稽古も付けるしな、着替えるのも面倒くさい。俺の兵たちは強いぞ、俺が手塩をかけて育てたからな」

「それとトルメキア王国は西の山脈を超えて勢力を伸ばしているぞうよ」

「あそこは火竜亜種の生息地だから人は手を入れないだろ」

「山脈を超えて南じゃなくて、西に向かっているのよ」

「そっちはエルフのパロアがあるんじゃないか？」

「それなのよ、パロアとトルメキアが戦争になるかもしれないわね」

「ふむ、俺も黒いが一応エルフだ、力にはなるぞ」

「それは助かるわ、パロワにもそう伝えておくわよ。でもここからパロワまではかなり遠いわ、トルメキアを通らないとかなり遠回りになるわよ」

「グラビティフォースで一直線で飛んでいけばそう遠くはない。それとも戦争になる前にトルメキアを潰してもいいぞ。これからパロアに向かうのか？」

「そうなるわね」

「それなら俺が連れていったほうが速いだろ」

「じゃあ、お願いするわ」

グラビティフォースを使って、1週間でパロワについた。

第15話 エルフの国パロワ

パロワ国のセントルシアの街についた。

「ここからどこに向かえばいいんだ？」

なんか視線が痛い……。早いとこ目的地に行きたい……。

「セントルシアの街の中心に王室があるわ、そこにいくわよ」

その城門には衛兵がいた。俺を入れてくれるのか？

エルフが衛兵となにやら話している。俺を指さしながら揉めているようだが、なんとか話がついたようだ。

王室とやらに入っていた。

「私が第一王子のガイラだ、ダークエルフがなんのようだ？」

「ここにいるのは一国の軍隊を一人で撃ち破った龍殺しのダークエルフです」

「そなたがそうか、噂には聞いている、確かセージといったな」

「はい、お初にお目にかかります、トルメキアと戦争になるんじゃないかと聞いてますが？」

「セージは、パロワを助けてくれるということなのです」

「既に、トルメキアはパロワの東に砦を築いている、軍隊も集めて

いるようだな」

「俺が撃つて出ましようか？、砦を軍隊ごと殲滅してみせますよ」

「待て、エルフはいきなり戦争をしかけるような野蛮なことはしない。まず使者を出してからだ」

「俺のことは伏せておいて下さい」

「なぜだ？お前の名を出せば向こうも引いてくれるだろうに」

「こういうことは、一度痛い目を味わわないと骨身に沁みないんですよ」

「分かった、そなたのことは伏せておくことにしよう」

実は、戦いを楽しみたいからだけなんだがな、言わないでおくことにしよう。

街に出ると痛い目で見られるので俺は王宮で時間を潰していた。

「お前が龍殺しのダークエルフか？私は第二王女のグラナダだ。お前の腕を見たい、うちの国の兵と戦ってみたいか？」

「暇を持て余してたんです。いいですよ」

マジで暇すぎたのだ、いい暇つぶしができた、いくらでもいい。

「ガンビアを呼べ！」

王宮がざわついている、どうやら一番強い兵を呼んだらしい。

「私が將軍を務めているガンビアだ、お前が噂のダークエルフか、ちようどいい。一度戦ってみたかったんだ」

プレートメールを着ている、どうやら魔法職ではないようだ。

ちなみに俺のレベルは120だ。覇竜を何度も殺したがこれ以上は上がらないのだ。カンストってやつだろうか。

訓練場に出て、手合わせをすることになった。相手は両手剣をかまえている。

スピードよりパワータイプというやつだろうか。

相手が両手剣を振り回してくるが、俺にはスローモーションにしか見えない。隙だらけだ。

両手剣を避けて、試しにプレートメールの上から腹を思いっきり殴ってみた。顔をなぐると死ぬかもしれないからだ。

プレートメールが砕けて、盛大に吹き飛んだ。意識はあるようだ。

「もう一度やるか？何度でもいいぞ」

「参った降参だ…」

どうやら立てないようだ。全体回復を発動した。みるみる回復していく。

「お前は回復職なのか…、助かった、死ぬかと思ったよ」

「どうだ、うちの將軍の腕前は？」

王女さんがなんか言ってるが、正直に言うことにした。

「俺の兵たちの方が齒こたえがあるな」

「うむ、どうやら鍛え方が足りないようだな、どうやって兵たちを鍛えているんだ？」

「基本を教えたら、迷宮に放り込む、迷宮では地上よりずっと成長が速いんですよ。後は、暇な時に俺が鍛えあげるくらいです」

「我が国には迷宮はないからな、弱いのもしょうがないのか」

「迷宮をもってる国の方が強いって言われてますからね」

そうやって兵の鍛錬をしていると、トルメキアからの返事がきたよ
うだ。

第16話 トルメキアとの戦争

「トルメキアは一步も譲らないそうだ、降伏を要求してきた、ふざけている！」

王子は怒っているようだ。

「では、俺は砦に殴りこみをかけてきますよ」

「わかった、トルメキアに攻め込め！」

俺はグラビティフォースをかけて砦に一気に近づいていった。
おもむろに、デストロイを撃ちこむ。

盛大に砦が吹っ飛んだ。

生き残りを狩る。全体強化を発動して狂戦士になった。

「最高の気分だぜ！」

俺と踊ろうぜ！！！！そして死ね！！！！

どんどん死ね！！！！もつと死ね！！！！

魔法が撃ち込まれる、レジストする、魔力と魔力がぶつかるのが気持ちいい！！！！どんどん撃ちこんでこい！！！！

俺と踊るやつはもういないのか！！！！

我に返ったが、やはり誰もいなくなっていた。

以前より齒ごたえがない。不完全燃焼だ。味方も殺したくなったが抑えている。

殺気を放ちながら、味方の陣地に戻った。やはり將軍を含めて青い顔をしている。

殺したいが、それはまずい、なかなか加護の影響が消えない。

仕方がない、俺は言った。

「ドルメキアに攻め込む！！！！」

もう俺を止める奴はいない。

グラビティフォースをかけて近くの街が見えてきた。

踊る相手を見つけた！！！！殺しまくった！！！！

自然と加護が発動していた、気分がいい！！！！最高だ！！！！

3つほど街を殲滅しただろうか？

やっと、気分が落ち着いた。

グラビティフォースでセントルシアの街に戻った。

王子が出迎えた。

「かなりの働きをしたようだな、感謝する」

「俺もかなり楽しめましたよ。つい、砦以外に3つほど街を潰しちゃいました。降伏勧告して、その街を奪っていいですよ」

「分かった、トルメキアと交渉してみる」

俺は訓練場に戻ったが、全員ドン引きしている。

「將軍を呼んでくれ、相手をしてやる」

勘弁してくれと言われた。相手がいない。暇だ。

トルメキア帝国の首都、トルメキアンでは紛糾していた。

皇帝ナウルヴァーンは怒り狂っていた。

「砦に続き、街を3つも滅ぼされただと！相手の兵力はどのくらいだったのだ！」

「どうやら相手は一人だけだったようです」

「馬鹿を言え！たった一人だと！」

「ダークエルフが襲っているのを逃げた人々から目撃されています」

「龍殺しのダークエルフか！なぜやつがパロアにいる！」

「パロアがダークエルフに助けを求めたとしか考えられません。それとパロアから降伏勧告が来ています。滅ぼした3つの街を要求します…」

「街を3つもか！渡せるはずがないだろう！」

「ですが、要求を飲まなければ我々は滅ぼされてしまいます…」

「どうにかならないのか？」

ここにきて、事態の深刻さに気づいた皇帝だった。

「どうにも交渉する材料がありません…」

「渡すしかないのか…」

「そうなります…」

「アルノールに仲介を頼めないのか？」

「間者によりますと、アルノールの総統もダークエルフには命令できないようです、腫れ物に触るかのような扱いで期待はできませんしょう」

「かまわぬ、使者を出せ！」

第17話 戦争の終結

アルノール共和国のラングの街、テオクライオンにトルメキアから使者が届いていた。

「あのダークエルフがトルメキアに攻め込んだそうだ…」

貴族たちに向かってそう言った。

「なぜやつがそんなことを!？」

「トルメキアがパロアを攻めたことがダークエルフの逆鱗に触れたようだ」

「それでどうなったのですか？」

「一人で皆ごと軍隊を潰して、そのまま3つの街を滅ぼしたと使者からきている」

「一人でですか？」

「そうだ。たった一人でだ…」

「それで我が国にどうしろと？」

「パロアからはトルメキアに3つの街を要求している。トルメキアは飲めないようだ。その仲介を頼まれた」

「ダークエルフは今どこにいるのですか？」

「どうやらパロアにいるらしい」

「総統は仲介をする気ですか？」

「前の総統からダークエルフの機嫌を損ねるなど言われているのだ。ようするに必要な以上に接触するなということだ」

「とすると、どういふつもりですか？」

「使者を追い返すしかないだろう」

「それでトルメキアは納得するのですか？」

「我々にとってはトルメキアよりダークエルフの方が危険なのだ」

総統はそう言った。

「…、分かりました、トルメキアには悪いですがそうするしかないようですな」

トルメキアの皇帝ナウルヴァーン宛にアルノールからの使者が届いた。

「アルノールは、ダークエルフを止める気がないと返事がきた！仲介はしないと言っている！どういふことだ！」

「間者によるとアルノールは我が国よりもダークエルフの方を恐れているようです」

。

「想定内の回答かと思います…」

「…、分かった、パロアには3つの街をくれてやれ…」

セントルシアの王宮で暇を潰していたがやっとトルメキアからの回答がきたようだ。

第一王子のガイラから呼ばれた。

「トルメキアから降伏条件を飲むと回答がきた」

「それはよかったですね、全面降伏ですか？」

「そうだ、賠償金も支払うと言ってきている」

「それでは俺もノワールの街に戻ります。俺が統治している領地ですからあまり留守はできないんですよ」

「そなたへの褒美はなにがいい？」

「別にいらんですよ」

「そついう訳にはいかないなにが欲しいか申せ」

「それじゃ、ミスリルの製法を教えてください」

「その製法はパロアの外には出せんだ、すまん。それ以外にしてくれ」

「それじゃ、ダークエルフのいる場所を教えてください」

「それは私にもわからないのだ、お前以外で見たことはない」

「それ以外には特に欲しいことはないです」

「そなたの願いを聞き入れなくてすまない」

龍殺しのダークエルフは帰っていった。

その後、王子は軍勢を連れて街に入った。

「これは、まるで地獄のような惨劇だな…、ガンビア。お前は、ダークエルフの戦いを見ていたそうだな、どうだった？」

「あれは悪魔のようでした…、思い出すと未だに震えが止まりません」

ガンビアは震えながら言い続けた。

「笑いながら敵を殺して行きました。その速さは目に止まらないものでした。風のような勢いでいつの間にか敵の血が吹き飛んでいく

一方的な虐殺でした、戦い終わった後は、腰が抜ける程の殺気を全身から発していました…、自分が殺されるのではないかと思いましたが…。まだ夢であのときのあの恐ろしい目を見ます…。そうすると全身が氷付きます…。その悪夢を未だに見ます…」

そして、ガンビアは訴えた。

「あのものを敵に回したらいけません！その時は我が国は滅ぶでしょう…」

第18話 トルメキアと伽盧皇国との戦争

エルフを連れて1週間かけてノワールに戻った。

特に異常はないようだ。總統からなにも言っていない。

久しぶりの戦争は面白かったが、以前ほどではなかった。物足りなさがあった。

どうやら、伽盧皇国がまたトルメキア帝国へと戦争を仕掛けたようだ。

よく飽きないものだ。まあ、自分には関係ない。

トルメキア帝国の首都、トルメキアンでは紛糾していた。

皇帝ナウルヴァーンは怒り狂っていた。

「伽盧皇国が攻めてきただと！」

「パロアとの敗戦を聞きつけて我が国が弱っていると思ったのだでしょう」

「戦う兵力は残っているのか？」

「パロアの砦以外の兵は後方の街に待機させていましたが全滅しました」

「龍殺しのダークエルフのせいだ！他に兵はあるのか？」

「治安維持用に兵はいますが、それを出すとこの国の治安が荒れるかと思っています」

「平民から徴兵すればいいではないか」

「重い税で平民も苦しんでおります、この上、徴兵を行うと国内がさらに疲弊するかと…」

「かまわぬ、貴族達から治安維持の兵を集めさせよ！徴兵も行っ！それとアルノールへ救援依頼の使者を出せ！この状況はアルノールのせいだ！」

アルノール共和国のラングの街、テオクライオンにトルメキアから使者が届いていた。

「トルメキアから救援依頼がきておる」

貴族たちを集めて議会を開いていた。

「トルメキアの危機はアルノールが原因だからトルメキアを救えと言っことだ、ダークエルフのせいでトルメキアには兵力がないそうだ」

「我々には全く関係ないではないですか！トルメキアが一方的にパロアを攻めたのが原因だ！」

「全くその通りだと私も思う、だが、伽盧皇国がトルメキア帝国を併合するのはまずい。龍殺しのダークエルフがいなくなれば、我々にも火の粉が降りてくるやもしれない。いつまでもあやつをあてにできないのだ」

「ではトルメキアのために兵を出すということですか？」

「いや、それよりいい方法がある」

第18話 トルメキアと伽盧皇国との戦争（後書き）

今回は短くてすみません。次回が長いのでこちらが短くなりました。
…。

第19話 ダークエルフの使者

俺に総統から使者が来た。討伐依頼か？

「手紙を一通、伽盧皇国の皇都へ届けて欲しいという依頼を持って参りました」

「宛先は誰だ？」

「那桜人皇王です」
ナオヒト

「内容はなんだ？」

「トルメキアと伽盧皇国との停戦依頼です」

「なんで俺なんだ？誰でもいいじゃないか」

「総統のご指名です」

「面倒な事は嫌いなんだがな」

「そこをなんとかお願いします」

「まあ分かった。届けばいいんだな、それ以外はなにもしないぞ」

「ありがとうございます」

なにやら土下座して総統の使者は帰っていった。

グラビティフォースでさくつと皇都に着いた。飛ばして3日だ。やはり走るのでは全然違う。

レベル120になるともはや魔物の森で寝ていても、余裕で対処できる。

HPが高いので睡眠中に攻撃されても平気なのだ。まあ、それでも痛いんだが…。

久しぶりの皇都だ。懐かしいな。今になってみればいい思い出だ。

南の城門の衛兵にギルドガードを見せる。

なにやら怯えている。無言でスルーだ。

とりあえず、用事というのを先に済ませよう。

皇宮に向かう、衛兵がいたがアルノールからの使いだと言ったら通してくれた。

なにも見せずともダークエルフだから分かっているようだ。

宰相とやらに会った。真田政宗という名前だ。

「何用で参った？」

「アルノールの総統からここの皇王に手紙を届けに来た」

そういつて手紙を渡した。これで仕事は完了した。楽だぜ。

「それじゃ、帰るわ」

歸りに久しぶりに酒場にも行こうか。

伽盧皇国の皇宮では、緊急会議が行われていた。

「アルノールからの手紙が届いた」

「どのような内容ですか？」

「我が国とトルメキアとの停戦依頼だ」

「なにをふざけたことを！アルノールには関係がないではないか！」

「内容が問題なのだ。依頼を拒否すればダークエルフを差し向けるということだ。すでにあやつはこの皇都に来ている、これは脅迫だ」

「龍殺しのダークエルフか！」

「あやつは、ウルズとトルメキアの軍を一人で潰した。今度は我が国を潰すということだ」

「龍殺しのダークエルフを使うとは卑怯だ！」

「これをどうするか、皆の意見を聞きたい」

「暗殺をしてはどうでしょうか？」

「失敗すればこの国は滅びるぞ、それにあやつは覇竜よりも強い。普通に殺せるとも思えぬ」

「では、停戦を受け入れるということですか!？」

「停戦などしたくないから皆を集めたのだ、トルメキアを潰せるのは今だけだ」

「皇都にいるなら呼んでみればいいのではないでしょうか？」

「あやつは我を嫌っている。呼んでも来ないだろう」

「宰相が会いにいくべきでしょう」

「なんで私が会いにいかなくてはいけないのだ!機嫌を損ねれば殺されるかもしれないのだぞ!」

「では他に誰が行くというのでしょうか？」

「宰相にこの件は預けた、なんとか懐柔しろ!」

皇王は宰相に命令した。

「…、分かりました」

宰相はギルドに入って、窓口の女の子に声をかけた。

「ギルドマスターはいるか？」

「これは政宗様ではないですか、こんなところに何用でしょう？」

「龍殺しのダークエルフを探しに来た、どこにいる？」

「迷宮に潜っていったみたいですよ」

「いつ出てくるのだ？」

「分かりませんよ、最下層の10階までいくつもりなら翌朝になるんじゃないですか？」

「そこまで一緒について来い」

「無理ですよ、SSランクじゃないと死にますよ？」

「そのSSランクとやらを連れてこい」

「SSランクは龍殺しのダークエルフだけです」

「私に迷宮の出口で朝まで待てというのか？」

「誰が見張りに立たせましょうか？」

「そうしてくれ、私はここで寝ているから見つけたら起こせ」

俺は最下層にいる。出てくる魔物がノワールと同じでつまらん。

いつもと違う歯ごたえのある奴はいないのか？

うろつろと探しているがいない…。

轟竜と出会ったが、探しているのはお前じゃない。グラビトンで殺した。

結局、覇竜と出会ってしまった。お前じゃない。グラビトンで殺した。

やはり、トルメキアに行かないと会えないのか？

でもあそこは行きにくいしな。軍隊丸ごと殺したし。

世知辛い世の中だと思い悩む。

やることもなくなったので地上にあがったら誰かいた。

「宰相がお待ちしております」

無視することにした。總統の使者にも手紙を渡す以外、なにもしないと言っている。

「知らんがな」

グラビティフォースで城壁を超えて逃げた。ノワールへ帰ろう。

ギルドでは、徹夜でギルドマスターが報告を待っていた。

「龍殺しのダークエルフに逃げられました」

報告が来たのは、真夜中だった。以外に早く迷宮から出てきたよう
だ。

「政宗様起きて下さい」

「ダークエルフがでてきたか？」

「逃げられました、既にこの街を出たようです」

「城門の門番はなにをしていた！」

「この時間ですと、門は閉まってますよ」

「では、どうやって出たのだ？」

「城壁を飛び越えてしまったようです」

「…、分かった、皇宮に戻る…」

皇宮では、真夜中に会議は招集された。

「宰相、お前はなぜ見逃したのだ！」

寝ていたとは言えない…。

「ギルドマスターに言っで迷宮の出口を見張らせていました」

「それで逃げられたのだろうか？なぜお前がそこにいなかったのだ！」

「申し訳ありません！」

駄目だ、もう謝るしかない。

「過ぎたことはもう良い、問題はどうかだ」

「もう停戦するしかないでしょう」

「軍隊はどうしておる？」

「国境で待機してます」

「呼び戻せ、停戦じゃ。トルメキアとアルノールにもそう使者を出せ！」

第20話 新しい領地

トルメキア帝国の首都、トルメキアンでは紛糾していた。

皇帝ナウルヴァーンは怒り狂っていた。

「アルノールからの使者がきた。停戦させた報奨を出せというのだ！」

「皇帝陛下、我が国の財政はすでに逼迫しております」

「どのくらい出せるのだ？」

「要求された金額の半分程度かと」

「無視した場合には、どうなるのだ？」

「確実に伽盧皇国が攻めてくるでしょう」

「では、どうすればいいのだ！」

「もう、分割払いということをお願いするしかありません」

「それで納得しなければどうすればいい？」

「領土を差し出すしかないでしょう」

「我が領土を渡せというのか！」

「それしか生き残るすがございせん」

「…、分かった、交渉はまかせる」

結局、アルノールは分割払いを認めず、領土の割譲をすることになった。

アルノール共和国のラングの街、総統府では議会を招集していた。

「トルメキアから割譲を受けた領土をどうするかだ」

テオクライオンもその取り扱いに困っていた。

そこはアルノールから最も離れたパロアとの国境線だったからだ。

「この領地を欲しいものは誰がいるのか？」

誰も欲しくないのだ。領地があればそこを守る兵力がいる。トルメキアとパロアに挟まれた領地なんて欲しくないのだ。

「ダークエルフに預ければいいのではないかと思います」

押し付けるにはいい相手だ。

「他に意見はないのか？」

なかった。

「それでは、この領地はダークエルフに預けることにする」

俺はまた総統の使者が来たということで、相手をしている。

今度はなんだ？討伐以外なら断る気だった。

「おめでとうございます、新しい領地をセージ様に与えることになりました」

言っていることが胡散臭い。

「それはどこだ？」

「トルメキアとバロアとの間になります」

「そんなものいらん」

「そう言われても、既にセージ様の領地でございます」

「それは、俺の好きにしていんだな？」

「左様でございます」

言質はとった。バロアにあげよう。

アルノール共和国のラングの街、総統府では議会を招集していた。
テオクライオンは頭をかかえていた。

「トルメキアから奪った領土をダークエルフがバロアに渡した」

「なにを勝手なことを！、一体どうするのですか！」

「ダークエルフにはなにも言えない、どうしようもないから議会を開いたのだ」

「バロアからはなにか言ってきたのですか？」

「使者が既に来た。感謝して帰っていった」

「なにも言わなかったのですか！」

「ダークエルフの機嫌を損ねることはできないのだ、言えるわけな
かろう、それにダークエルフからも使者がきた」

「なにを言ってきたのですか？」

「好きにしていいた言われたのでバロアにあげた、そう言ってきた」

「誰がそんなことを言ったのですか？」

「私の使者だ……」

「どうにもなりませんな」

「私もどこにもならないと思う……」

第21話 ダークエルフの統治（2）

俺は、仕事をしていた。

これでも採算や投資の配分というのを考えないといけないのだ。特産品やこの街特有の食べ物といったものがあるため、観光客も増えている。

公衆馬車は利益を出している。畜産、酒、工業品や商人からの売上も上々だ。

魔石も冒険者の死亡率を落ちるようにしてから増加している。設備投資に回せる資金も以前より増えている。

ただ、農業に対しては魔物対策や外壁の建築と実質赤字だ。

課税も少なめに行っているせいなのだが、危険な街の外での仕事となるため上げる訳にもいかない。

農業は割のいい仕事にしないと人が集まらないのだ。

兵を維持するにも金がかかる。魔物対策として皆に兵を常駐させるのもお金がかかるのだ。

治安維持といった仕事もある。

職業の中で兵隊というものは、なにも利益を出さないのだ。

工業では、冶金がメインだ。

前の世界での便利な製品を次々と生産している。プラスチックはないのでそれは木で代用している。

ガラスも使用しているが、耐久性として木の方がいい。ガラスは酒の入れ物に必要なだ。

酒の売上に伴ってガラスの生産も上げている。

これらの売上にも設備投資が必要になる。生産規模をさらに拡大す

るのだ。さらなるガラス職人、鍛冶職人の育成をしなければいけない。

問題は生産をあげても原料が不足気味なことだ。

これもどうにかしたいが、俺の領地以外のことだから手を出せない。あまりにひどいようなら鉱山を奪うか？

とりあえず、後回しにしている。

幸い、植林を考えなくても木は自然と増えている。邪魔なくらいだ。それくらいこの世界の森の繁殖力は高い。そりゃ、森だらけになるわけだ。

酒の生産についても拡大している。問題はやはりガラスだ。不足しているガラスの代わりに樽ごと販売することもしている。樽は木で生産できるからいい。

その点、畜産は楽だ。餌は自給か輸入すればいいのでいくらでも拡大できる。後は、発酵食品なのでチーズは紙、バターは油紙で包めばいいだけだ。ビニールが欲しいがないものはしょうがない。

あとは、医薬品と衣料品だがこれは諦めている。知識やセンスが俺には全くない。

自然と衣料品が増えるのに任せている。人が増えれば衣料品の需要も高くなるのに任せているのだ。

需要に生産が追いつかなくなるようなら、職人の育成もまた必要になるだろう。

唯一の医薬品は、アルコールだ。蒸留酒から作れるからだ。傷口の殺菌にも燃料にも使える。

意外と、アルコールランプは見栄えが良かったためか受けている。薪や油よりは、炭もださないのもある。

元からこの世界にある冒険者向けの塗り薬も生産を上げている。効果は以前の世界にはなかったくらい高い。その分、価格も高いのだ。一般向けには高価なため出回ってなかった。それを改善する必要がある。

公衆トイレもそうだが、清潔さが高くないと病気になったりして死亡率があがる。清潔さを保つ必要がある。

ゴミの収集や焼却などの設備も清潔さを保つには必要だ。これにも金がかかる上に、利益を出さない。

だが、公共サービスにしないと利用する意味がないからだ。

ちなみに、ガラスや鉄類については廃品回収を推進している。材料が不足気味だからだ。エコも大事だ。

生産物が増えれば、自然と商業も活発になる。商業の街でそれらを販売しているからだ。

第二の商業の街を作る必要がある。これにもそろそろ着手しないといけない。最初は商業で2つ、工業で2つとなる予定だったが、商業で3つ、工業で1つは必要になりそうだ。

工業は、やはり原材料不足で生産をあげる限界がそのうちくるだろう。

工業の街はもとも余裕をもって大きめに作っておいたものもある。工場は大きな場所をとるからだ。

トータルでは黒字だ、それを工業への設備投資、外壁、街の建設に回すことにする。

商業の街の建設をいよいよ始めよう。第3の街だ。イーストノワー

ルとする。

建設のためには、人を外から雇わないと足りない。募集しないとなあ。

それと義務教育ではないが小学校を立てた。教育も必要だ。街に1つづつだが入学できるのはこの街の平民のみだ。貴族は勝手に勉強しろ。他の街の面倒はみない。費用は無料にしたが昼飯は持参させる。そこまでは金は出せない。

これでありたければ勝手に商人になれるだろう。商業を発展させる。イーストノワールに商人は必要だ。

アルノール共和国のラングの街、総統府ではテオクライオンは頭をかかえていた。

ダークエルフが人をどんどん集めている。なにやら新しい街を作っているようだ。

この国の人口がノワールへと集まっている。

元々、ノースノワールとやらとサウスノワールとやらは他の街よりも規模が大きいのだ。

それをさらに増やそうとしている。

周辺の貴族からも苦情がきているが、どうすることもできない。

共和制をしているため、基本的に国民の移動は自由だ。平院への投票権もある。

そうすることで貴族がむやみに税を重くすることを防いでいるのだ。

今までは、ノワールの街の視察をしていなかった。

事実上、独立を宣言しているからだが、一度様子を見てみる必要がありそうだ。

まず、文をダークエルフに出してからだな…。

第21話 ダークエルフの統治(2) (後書き)

苦手な回がまた来ました…。

ちょこちょこ修正やら削除やらを試みましたがこうなりました…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4313y/>

ゴブリンシャーマンに召喚されたら、ダークエルフだった...

2011年11月19日12時21分発行